

7-6. 陸域生態系

7-6-1. 現況調査

(1) 既存資料調査

1) 陸生動物

① 調査地域

事業計画地周辺及び泉北地域（以下、「周辺地域」という。）とした。

② 調査地点

調査地域と同じとした。

③ 調査時期

入手可能な最新資料について隨時調査を行った。

④ 調査結果

a. 哺乳類

周辺地域における哺乳類相の状況は、表7-6-1-1に示すとおりであり、13種の生息が確認されている。なお、種名は「日本産野生生物目録（環境庁編、脊椎動物編）」（（財）自然環境研究センター、平成5年）に準じた。

表7-6-1-1 周辺地域における哺乳類相

確認種数	確認種
13	ヒミズ ^{注1} 、モグラ、アブラコウモリ、ニホンザル、ノウサギ ^{注2} 、アカネズミ、カヤネズミ、タヌキ、キツネ、テン ^{注3} 、イタチ、アナグマ、ニホンイノシシ ^{注4}

出典： i 「堺市自然環境基礎調査報告書」（社団法人大阪自然環境保全協会、平成11年）

ii 「大阪府野生生物目録」（大阪府、平成12年）の内、泉北地域確認種資料

注1) i では「ホンシュウヒミズ」と記載。

注2) i では「ニホンノウサギ」と記載。

注3) i では「ニホンテン」と記載。

注4) i 及び ii では「イノシシ」と記載。

また、近年において事業計画地周辺で現地動植物調査が実施された他事業の環境影響評価が3件（表7-6-1-2注参照）あり、その結果は表7-6-1-2に示すとおりである。（以下、これら3事業の環境影響評価を総称して「周辺3事業アセス」という。）

表7-6-1-2 周辺3事業アセスにおける哺乳類相

アセス名（省略）*	確認種数	確認種
泉北天然ガス発電所	1	アブラコウモリ
堺港発電所設備更新	1	コウモリ目の一種
堺製油所高度化事業	3	ヒナコウモリ科の一種、ハツカネズミ、イタチ属の一種

*正式名称は以下の出典のとおり。

泉北天然ガス発電所：「泉北天然ガス発電所に係る環境影響評価書」（大阪ガス株式会社、平成18年）

堺港発電所設備更新：「堺港発電所設備更新に係る環境影響評価書」（関西電力株式会社、平成18年）

堺製油所高度化事業：「コスモ石油㈱堺製油所高度化事業に係る環境影響評価書」（コスモ石油株式会社、平成19年）

b. 鳥類

周辺地域における鳥類相の状況は、表 7-6-1-3 に示すとおりであり、266 種の生息が確認されている。なお、種名は「日本鳥類目録 改訂第 6 版 2000」(日本鳥学会)に準じた。

表 7-6-1-3 周辺地域における鳥類相

確認種数	主な確認種
266	カイツブリ、アオサギ、カルガモ、トビ、ハヤブサ、バン、コチドリ、ケリ、キアシシギ、ユリカモメ、コアジサシ、キジバト、ヒバリ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、イソヒヨドリ、オオヨシキリ、セッカ、ホオジロ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ等

出典：「堺市自然環境基礎調査報告書」(社団法人大阪自然環境保全協会、平成 11 年)
「大阪府野生生物目録」(大阪府、平成 12 年) の内、泉北地域確認種資料

周辺 3 事業アセスによると、鳥類相は表 7-6-1-4 に示すとおりである。

表 7-6-1-4 周辺 3 事業アセスにおける鳥類相

アセス名（省略）	確認種数	主な確認種
泉北天然ガス発電所	52	コチドリ、セッカ等
堺港発電所設備更新	52	ヒヨドリ、スズメ等
堺製油所高度化事業	58	カモ類、猛禽類、コチドリ、コアジサシ、オオヨシキリ、ヒヨドリ等

出典

泉北天然ガス発電所：「泉北天然ガス発電所に係る環境影響評価書」(大阪ガス株式会社、平成 18 年)

堺港発電所設備更新：「堺港発電所設備更新に係る環境影響評価書」(関西電力株式会社、平成 18 年)

堺製油所高度化事業：「コスモ石油(株)堺製油所高度化事業に係る環境影響評価書」(コスモ石油株式会社、平成 19 年)

c. 爬虫類・両生類

周辺地域における爬虫類・両生類相の状況は、表 7-6-1-5 に示すとおりであり、爬虫類 13 種、両生類 15 種の生息が確認されている。なお、種名は「日本産野生生物目録（環境庁編、脊椎動物編）」（（財）自然環境研究センター、平成 5 年）に準じた。

表 7-6-1-5 周辺地域における爬虫類・両生類相

確認種数	確認種
爬虫類 13	アカウミガメ、クサガメ、アカミミガメ、イシガメ、スッポン、ヤモリ、トカゲ、カナヘビ、シマヘビ、アオダイショウ、ヒバカリ、ヤマカガシ、マムシ
両生類 15	カスミサンショウウオ、ブチサンショウウオ、オオサンショウウオ、イモリ、ニホンヒキガエル、アマガエル、タゴガエル、ニホンアカガエル、トノサマガエル、トウキョウダルマガエル※、ヌマガエル、ウシガエル、ツチガエル、シュレーゲルアオガエル、カジカガエル

出典： i 「堺市自然環境基礎調査報告書」（社団法人大阪自然環境保全協会、平成 11 年）

ii 「大阪府野生生物目録」（大阪府、平成 12 年）の内、泉北地域確認種資料

※ i 及び ii では「ダルマガエル」と記載。

周辺 3 事業アセスによると、爬虫類・両生相は表 7-6-1-6 に示すとおりである。

表 7-6-1-6 周辺 3 事業アセスにおける爬虫類・両生類相

アセス名（省略）	確認種数	確認種
泉北天然ガス発電所	爬虫類 4	クサガメ、アカミミガメ、トカゲ、シマヘビ
	両生類 1	アマガエル
堺港発電所設備更新	爬虫類 0	—
	両生類 2	トノサマガエル、ヌマガエル
堺製油所高度化事業	爬虫類 5	クサガメ、アカミミガメ※、ヤモリ、カナヘビ、アオダイショウ
	両生類 4	アマガエル、トノサマガエル、ヌマガエル、ウシガエル

出典：

i 泉北天然ガス発電所：「泉北天然ガス発電所に係る環境影響評価書」（大阪ガス株式会社、平成 18 年）

ii 堀港発電所設備更新：「堀港発電所設備更新に係る環境影響評価書」（関西電力株式会社、平成 18 年）

iii 堀製油所高度化事業：「コスモ石油㈱堺製油所高度化事業に係る環境影響評価書」（コスモ石油株式会社、平成 19 年）

※ 並では「ミシシッピアカミミガメ」と記載。

d. 昆虫類

周辺地域における昆虫類相の状況は、表 7-6-1-7 に示すとおりであり、2,060 種の生息が確認されている。なお、種名は「日本産野生生物目録（環境庁編、無脊椎動物編Ⅱ）」（財）自然環境研究センター、平成 7 年）に準じた。

表 7-6-1-7 周辺地域における昆虫類相

確認種数	主な確認種
2,060	シロタニガワカグロウ、シオカラトンボ、オニヤンマ、オオカマキリ、キリギリス、アオマツムシ、アメンボ、クマゼミ、ヒラタクワガタ、カブトムシ、マメコガネムシ、ナナホシテントウ、クマバチ、ニホンミツバチ、ナミアゲハ等

出典：「堺市自然環境基礎調査報告書」（社団法人大阪自然環境保全協会、平成 11 年）

「大阪府野生生物目録」（大阪府、平成 12 年）の内、泉北地域確認種資料

周辺 3 事業アセスによると、昆虫類相は表 7-6-1-8 に示すとおりである。

表 7-6-1-8 周辺 3 事業アセスにおける昆虫類相

アセス名（省略）	確認種数	主な確認種
泉北天然ガス発電所	474	シオカラトンボ、エンマコオロギ、アオスジアゲハ等
堺港発電所設備更新	373	ギンヤンマ、クマゼミ、ヤマトシジミ等
堺製油所高度化事業	258	ウスバキトンボ、トノサマバッタ、ベニシジミ等

出典：

泉北天然ガス発電所：「泉北天然ガス発電所に係る環境影響評価書」（大阪ガス株式会社、平成 18 年）

堺港発電所設備更新：「堺港発電所設備更新に係る環境影響評価書」（関西電力株式会社、平成 18 年）

堺製油所高度化事業：「コスモ石油㈱堺製油所高度化事業に係る環境影響評価書」（コスモ石油株式会社、平成 19 年）

2) 陸生植物

① 調査地域

周辺地域とした。

② 調査地点

調査地域と同じとした。

③ 調査時期

入手可能な最新資料について隨時調査を行った。

④ 調査結果

周辺地域における植物相の状況は、表 7-6-1-9 に示すとおりであり、シダ植物以上の高等植物として 1,745 種の生育が確認されている。

なお、種名は「植物目録 1987」(環境庁、昭和 62 年)、「河川水辺の国勢調査のための生物リスト(植物)」(国土交通省、平成 20 年)、「原色日本植物図鑑、草本編 I ~ III、木本編 I ~ II」(保育社、昭和 58~59 年改訂版)、「原色日本帰化植物図鑑」(保育社、昭和 58 改訂版)、「日本水生植物図鑑」(北隆館、昭和 55 年初版) に準じた。

表 7-6-1-9 周辺地域における植物相

確認種数	主な確認種
1,745	ヨモギ、キキョウ、ヒヨドリジョウゴ、ヒルガオ、アセビ、スミレ、サンショウ、クズ、ナズナ、クスノキ、アラカシ、アカマツ、ウラジロ等

出典：「堺市自然環境基礎調査報告書」(社団法人大阪自然環境保全協会、平成 11 年)

「大阪府野生生物目録」(大阪府、平成 12 年) の内、泉北地域確認種資料

周辺 3 事業アセスによると、植物相は表 7-6-1-10 に示すとおりである。

表 7-6-1-10 周辺 3 事業アセスにおける植物相

アセス名(省略)	確認種数	主な確認種
泉北天然ガス発電所	333	シバ、スズメノヒエ、イチョウ、ヤマモモ、マテバシイ等
堺港発電所設備更新	212	クスノキ、アラカシ等
堺製油所高度化事業	345	スギナ、イチョウ、ウバメガシ、ハマボッス、ススキ等

出典：

泉北天然ガス発電所：「泉北天然ガス発電所に係る環境影響評価書」(大阪ガス株式会社、平成 18 年)

堺港発電所設備更新：「堺港発電所設備更新に係る環境影響評価書」(関西電力株式会社、平成 18 年)

堺製油所高度化事業：「コスモ石油㈱堺製油所高度化事業に係る環境影響評価書」(コスモ石油株式会社、平成 19 年)

周辺地域における現況植生の状況は、図 7-6-1-1 に示すとおりである。

事業計画地は臨海埋立地で、周辺は東側が工場地帯、西側が空き地の雑草群落や一部植林が見られる造成地となっている。



凡 例

■ 41. フラツ群落	■ 95. その他植林	■ h. ゴルフ場・芝地
■ 58. ケヤキムクニ群集	■ 96. 竹林	■ i. 緑の多い住宅地
■ 69. 7ペマキコナラ群集	■ 99. 残存・植栽樹群をもつた公園、墓地等	■ k. 市街地
■ 70. モチツツシーカマツ群集	■ 110. 河辺一年生草本群落(カキゴケス)	■ L. 工場地帯
■ 82. ヨシクラス	■ 116. その他植林(常緑広葉樹)	■ m. 造成地
■ 86. ヒルムシロクラス	■ a. 煙雜草群落	■ r. 自然裸地
■ 91. スギ・ヒノキ・サワラ植林	■ b. 水田雜草群落	■ w. 開放水域
■ 93. クマツ植林	■ f. 路傍・空地雜草群落	

出典：「第6回・第7回自然環境保全基礎調査 植生調査」

(環境省 自然環境局 生物多様性センターホームページ) より作成



0 1km 2km

図 7-6-1-1 現況植生図

(2) 現地調査

1) 哺乳類

① 調査地域

事業計画地とした。

② 調査地点

調査地域内において、トラップを2地点に設置し、調査地域全域を対象に任意観察を行った。トラップの設置地点は図7-6-1-2に示すとおりである。

③ 調査時期

現地調査は、平成20年1月から10月にかけて4回実施しており、調査方法及び調査日は、表7-6-1-11に示すとおりである。

表7-6-1-11 哺乳類調査時期、調査方法及び調査日

時期	調査方法	調査日
冬季	フィールドサイン法	平成20年1月24日
	トラップ法	平成20年1月24、25日
春季	フィールドサイン法	平成20年5月19日
	トラップ法	平成20年5月20、21日
夏季	フィールドサイン法	平成20年7月11日
	トラップ法	平成20年10月20日
秋季	フィールドサイン法	平成20年10月20、21日
	トラップ法	

④ 調査方法

調査方法は、糞、足跡、食痕、巣穴等により生息種を確認するフィールドサイン法及び主にネズミ類等の小型哺乳類を対象としたライブトラップを用いるトラップ法を実施し、哺乳類の種名を記録した。

⑤ 調査結果

現地調査の結果、2目2科2種の哺乳類が確認された。確認種一覧は表7-6-1-12に示すとおりである。

現地調査で確認された種は近畿地方の平地から山地にかけて普通に見られる種である。

事業計画地内は、ウバメガシ等の広葉樹を主体とした植栽林、乾性の草地、人工裸地といった環境となっており、人為的な要素の強い環境である。このような環境を反映し、哺乳類相は貧弱なものとなっており、確認個体数も少なかった。

表7-6-1-12 確認種一覧（哺乳類）

分類			調査時期			
目名	科名	種名	1月	5月	7月	10月
ネズミ目（齶歯目）	ネズミ科	ハツカネズミ	○	○		
		ネズミ科の一種 ^{注1}	○	○	○	
ネコ目（食肉目）	イタチ科	チョウセンイタチ		○		
		イタチ属の一種 ^{注2}	○	○	○	○
合計 2目2科2種 ^{注3}			2種	2種	2種	1種

注1) 巣穴のみの確認であるため、ネズミ科の一種とした。

注2) 足跡及び糞の確認であるため、イタチ属の一種とした。

注3) 種数は「平成18年度版河川水辺の国勢調査マニュアル」（国土交通省）の各調査編「集計上の際の留意点」に記載された種数の集計方法により求めた。他の動植物についても同様とした。

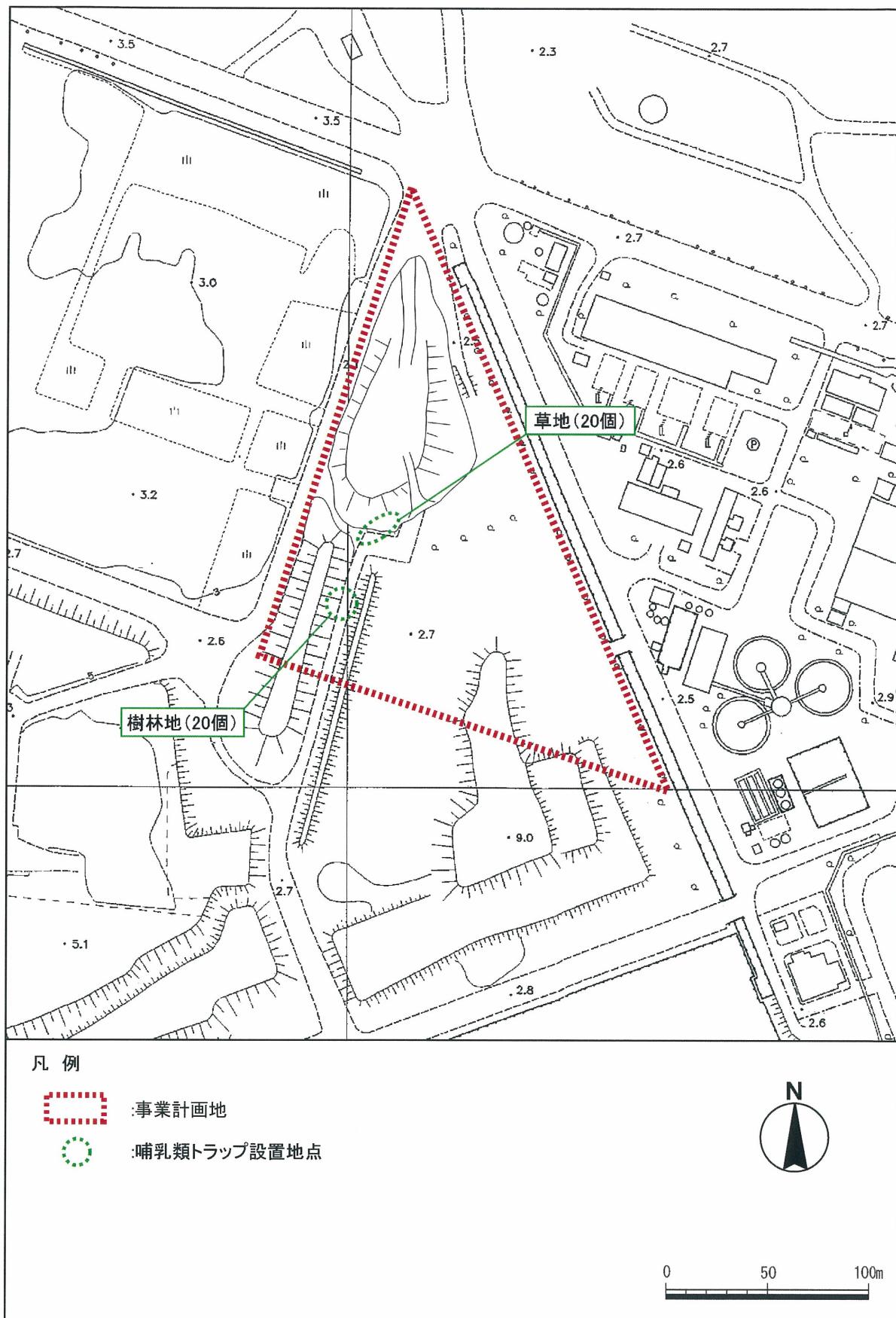


図 7-6-1-2 トラップ設置地点（哺乳類）

2) 鳥類

① 調査地域

事業計画地とした。

② 調査地点

調査地域内において、ポイントセンサスを1地点、ラインセンサスを1ルートで行い、また、調査地域全域を対象に任意観察を行った。ポイントセンサスの調査地点及びラインセンサスの調査ルートは図7-6-1-3に示すとおりである。

③ 調査時期

現地調査は、現地調査は、平成20年1月から9月にかけて6回実施しており、調査日は表7-6-1-13に示すとおりである。

表7-6-1-13 鳥類調査時期及び調査日

時期	調査日
1月	平成20年1月24日
4月	平成20年4月11日
5月	平成20年5月19、21日
6月	平成20年6月13日
7月	平成20年7月10日
9月	平成20年9月10日

④ 調査方法

調査方法は、設定した調査定点に留まり出現する鳥類を記録するポイントセンサス法、設定した調査ルートを緩速度で歩きながら調査ルート周辺に出現する鳥類を記録するラインセンサス法及び調査地域内の任意場所での観察による任意観測法で実施し、鳥類の種名及び状況等を記録した。

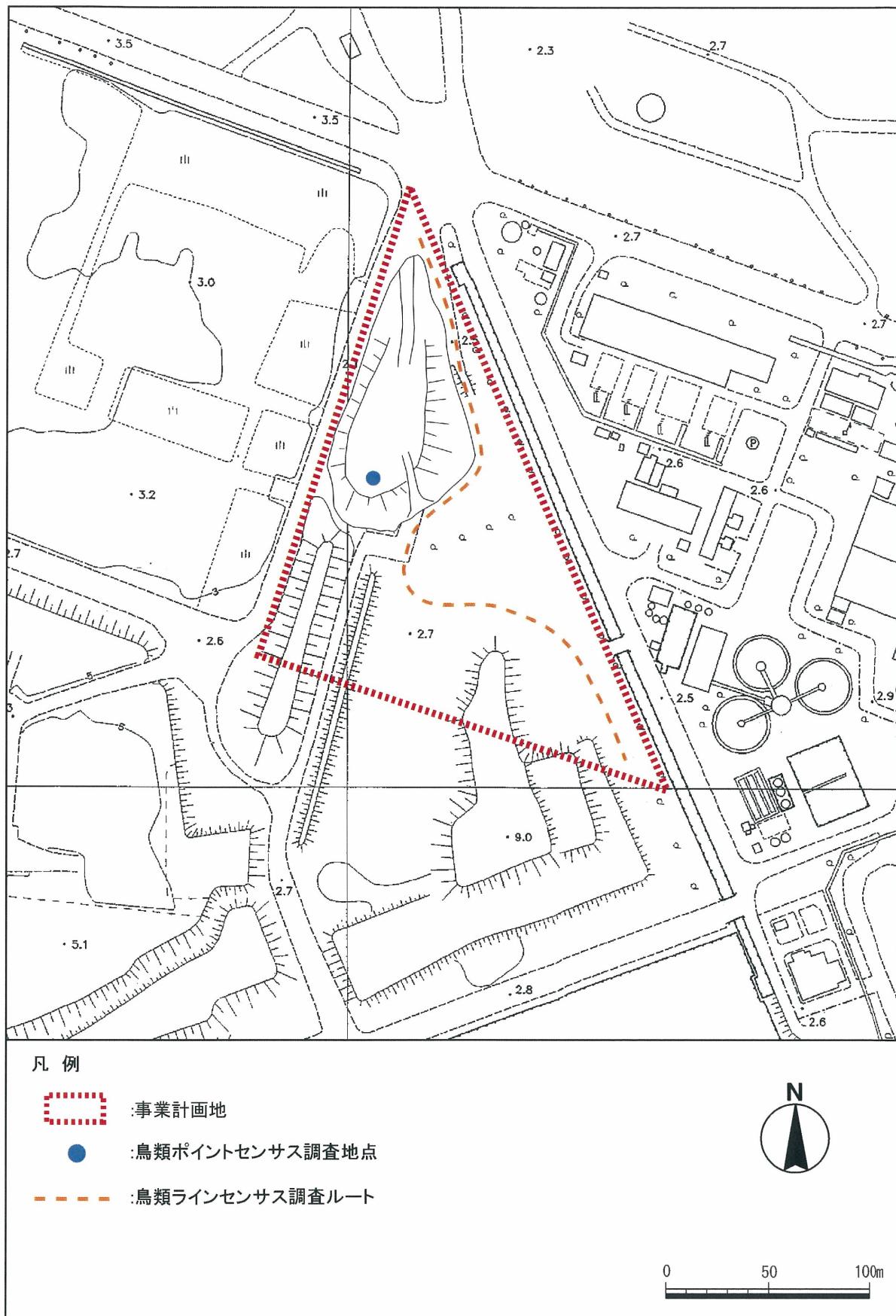


図 7-6-1-3 調査ルート及び調査地点（鳥類）

⑤ 調査結果

現地調査の結果、7目22科32種の鳥類が確認された。確認種一覧を表7-6-1-14に示す。

渡り区別では、留鳥が23種、夏鳥が4種、冬鳥が5種であった。

現地調査で確認された鳥類は、大部分が近畿地方の平地から山地にかけて比較的普通に見られる種であった。

事業計画地内は、ウバメガシ等の広葉樹を主体とした植栽林、乾性の草地、人工裸地といった環境となっており、人為的な要素の強い環境である。

これらの環境を反映して、ヒヨドリやキジバト等の樹林性の種、ヒバリ、カワラヒワ等の草地性の種、ドバト、スズメ、ムクドリ、ハシブトガラス等の人里周辺に出現する種を主体とした鳥類相となっていた。

カワウ、サギ類、カルガモ等の水辺に生息する種も確認されたが、事業計画地内には開放水面は存在せず、上記の種は上空通過または一時的な水たまりで確認された程度であった。

また、チョウゲンボウが確認され、猛禽類のペリットや食痕も確認されていることから、事業計画地は猛禽類の餌場の一部として利用されていることが伺える。

表 7-6-1-14 確認種一覧（鳥類）

分類			渡り区分*	調査時期					
目名	科名	種名		1月	4月	5月	6月	7月	9月
ペリカン	ウ	カワウ	留鳥	○	○	○	○	○	○
コウノトリ	サギ	ダイサギ	留鳥			○	○		
		アオサギ	留鳥		○	○	○	○	○
カモ	カモ	カルガモ	留鳥			○	○		
タカ	タカ	ミサゴ	留鳥						○
		トビ	留鳥	○					
	ハヤブサ	チョウゲンボウ	冬鳥	○					
チドリ	チドリ	コチドリ	夏鳥		○	○	○	○	
		ケリ	留鳥		○	○	○	○	
	カモメ	コアジサシ	夏鳥			○			
ハト	ハト	ドバト	留鳥	○	○	○		○	○
		キジバト	留鳥	○	○	○	○	○	○
スズメ	ヒバリ	ヒバリ	留鳥	○	○	○	○	○	○
	ツバメ	ツバメ	夏鳥		○	○	○	○	○
	セキレイ	ハクセキレイ	留鳥	○	○	○	○	○	○
	ヒヨドリ	ヒヨドリ	留鳥	○	○	○	○	○	○
	モズ	モズ	留鳥	○	○	○	○		
	ツグミ	ジョウビタキ	冬鳥	○					
		シロハラ	冬鳥		○				
		ツグミ	冬鳥	○	○				
	ウグイス	ウグイス	留鳥		○			○	
		オオヨシキリ	夏鳥			○	○	○	
		セッカ	留鳥		○	○	○	○	○
	シジュウカラ	シジュウカラ	留鳥				○		○
	メジロ	メジロ	留鳥	○	○	○	○		○
ホオジロ	ホオジロ	留鳥	○	○					
	アオジ	冬鳥	○	○					
アトリ	カワラヒワ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○
ハタオリドリ	スズメ	留鳥		○	○	○	○	○	○
ムクドリ	ムクドリ	留鳥	○		○	○	○	○	○
カラス	ハシボソガラス	留鳥		○					
	ハシブトガラス	留鳥	○	○	○	○	○	○	○
合計 7目22科32種				17種	22種	21種	20種	17種	16種

*渡り区分は「大阪府鳥類目録 2001」((財)日本野鳥の会大阪支部)による。

3) 爬虫類・両生類

① 調査地域

事業計画地とした。

② 調査地点

調査地域全域を対象に任意観察を行った。

③ 調査時期

現地調査は、平成 20 年 5 月から 10 月にかけて 3 回実施した。

調査時期及び調査日を表 7-6-1-15 に示す。

表 7-6-1-15 爬虫類・両生類調査時期及び調査日

時期	調査日
春季	平成 20 年 5 月 19 日
夏季	平成 20 年 7 月 11 日
秋季	平成 20 年 10 月 20 日

④ 調査方法

調査地域内の任意場所での観察によって確認された爬虫類・両生類の種名を記録した。

⑤ 調査結果

現地調査の結果、両生類は確認されず、爬虫類は重要種であるトカゲ及びカナヘビの 2 種が確認された。確認種一覧を表 7-6-1-16 に示す。

現地調査で確認された爬虫類の上記の 2 種は、近畿地方の平地から山地にかけて普通に見られる種である。

事業計画地内は、ウバメガシ等の広葉樹を主体とした植栽林、乾性の草地、人工裸地といった環境となっており、人為的な要素の強い環境である。このような環境を反映し、爬虫類相は貧弱なものとなっており、確認個体数も少なかった。

また、事業計画地内には、一時的な水たまりを除いて水域は存在せず、両生類は確認されなかった。

表 7-6-1-16 確認種一覧（爬虫類）

目名	分類		調査時期		
	科名	種名	5月	7月	10月
トカゲ目	トカゲ科	トカゲ	○		
	カナヘビ科	カナヘビ	○	○	
合計 1目2科2種			2種	1種	0種

4) 昆虫類

① 調査地域

事業計画地とした。

② 調査地点

調査地域内において、トラップを2地点に設置し、調査地域全域を対象に任意観察を行った。トラップの設置地点は図7-6-1-4に示すとおりである。

③ 調査時期

現地調査は、平成20年5月から10月にかけて3回実施した。

調査時期及び調査日を表7-6-1-17に示すとおりである。

表7-6-1-17 昆虫類の調査時期、調査方法及び調査日

時期	調査方法	調査日
春季	任意採集法	平成20年5月19日
夏季	任意採集法	平成20年7月11日
	ライトトラップ法	平成20年7月10、11日
	ベイトトラップ法	平成20年7月10、11日
秋季	任意採集法	平成20年10月20日
	ライトトラップ法	平成20年10月20、21日
	ベイトトラップ法	平成20年10月20、21日

④ 調査方法

任意場所での捕虫網による捕獲、目視による任意採集法、夜間灯火に集まる昆虫類の習性を利用して採集するライトトラップ法及び徘徊性の昆虫類を対象に誘因餌を入れたコップに落ちた昆虫類を採集するベイトトラップ法により実施した。

⑤ 調査結果

現地調査の結果、15目141科347種の昆虫類が確認された。分類別確認種数を表7-6-1-18に示す。

現地調査で確認された昆虫類は、大部分が近畿地方の平地から山地にかけて比較的普通に見られる種であった。

分類別では、コウチュウ目が33科116種と最も多く、次いでカメムシ目が23科58種、以下ハエ目が27科51種、ハチ目が20科41種、チョウ目が16科41種となっていた。これら上位5目で307種となり全体の88.5%を占めていたが、これらは元来種類数の多い分類群であり、当該地に限った特徴ではない。

事業計画地内は、ウバメガシ等の広葉樹を主体とした植栽林、乾性の草地、人工裸地といった環境となっており、人為的な要素の強い環境である。このような環境を反映し、カメムシ目のヨコバイ科やカスミカメムシ科、ハエ目のハナアブ科、コウチュウ目のテントウムシ科やハムシ科等の草地に生息する種が多く確認された。また、事業計画地は一時的な水たまりを除き、水域は存在しないため、トンボ目、コウチュウ目のゲンゴロウ科やガムシ科等の水辺に生息する種は確認種数が少なかった。

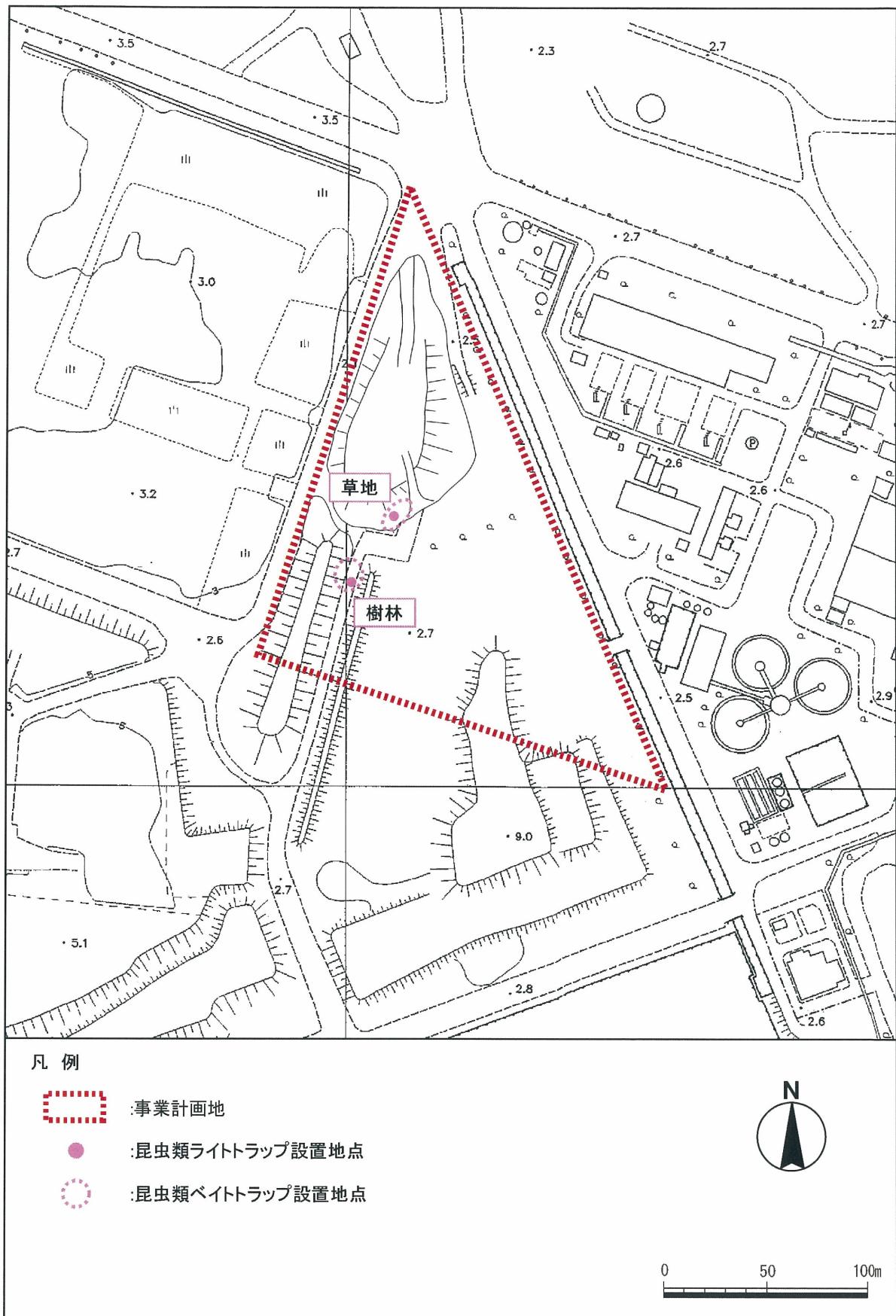


図 7-6-1-4 トラップ設置地点（昆虫類）

表 7-6-1-18 分類別確認種数（昆虫類）

目名	5月		7月		10月		全体		主な出現種
	科数	種数	科数	種数	科数	種数	科数	種数	
トビムシ	-	-	1	1	1	1	1	1	アヤトビムシ科の一種
トンボ	3	3	3	6	1	1	3	7	アオモンイトンボ、マイコアカネ等
ゴキブリ	1	1	2	2	1	1	2	2	コワモンゴキブリ等
カマキリ	1	1	1	3	1	3	1	3	ハラビロカマキリ、コカマキリ等
ハサミムシ	1	1	1	2	1	2	1	2	キアシハサミムシ、ヒゲジロハサミムシ
バッタ	-	-	4	6	6	11	6	13	ツユムシ、トノサマバッタ等
チャタテムシ	1	1	2	2	1	1	3	3	スカシチャタテ、マルチャタテ等
カメムシ	14	24	18	31	16	33	23	58	コブウンカ、クマゼミ、ナガメ等
アザミウマ	2	2	1	1	1	1	2	2	シマアザミウマ科の一種等
アミメカゲロウ	2	4	1	3	2	5	2	6	ニッポンクサカゲロウ、ミドリヒメカゲロウ等
トビケラ	-	-	-	-	1	1	1	1	Hydroptila属の一種
チョウ	8	10	14	20	10	21	16	41	コチャバネセセリ、ツマグロヒヨウモン、アオスジアゲハ、オオウンモンクチバ等
ハエ	13	18	16	21	23	35	27	51	ユスリカ科の一種、ホソヒラタアブ、ヒヨウモンショウジョウバエ、タネバエ、コニクバエ等
コウチュウ	12	33	30	74	15	47	33	116	ミイデラゴミムシ、セアカヒラタゴミムシ、コハンミョウ、ツシマヒラタシデムシ等
ハチ	7	9	12	23	15	28	20	41	セアカヒメバチ、クロヤマアリ、コガタスズメバチ、ニホンミツバチ等
合計	65	107	106	195	95	191	141	347	

5) 陸生植物

① 調査地域

事業計画地とした。

② 調査地点

調査地域全域を対象とした。

③ 調査時期

現地調査は、平成 20 年 5 月から 10 月にかけて 3 回実施した。

調査時期及び調査日を表 7-6-1-19 に示すとおりである。

表 7-6-1-19 陸生植物調査時期及び調査日

時期	調査日
春季	平成 20 年 5 月 19 日
夏季	平成 20 年 7 月 11 日
秋季	平成 20 年 10 月 20 日

④ 調査方法

a. 植物相調査

事業計画地の現状を把握するため、調査地域を踏査して生育種を目視により確認し、種名を記録した。

なお、現地での同定が困難な種については、標本を採取し、室内で種の同定を行った。

b. 植生調査

植生調査は、Braun-Blanquet の植物社会学的手法により行った。

対象とする植物群落に、概ね群落高を一辺とするコドラートを設定し、階層毎に出現種、被度、群度、植被率を記録した。

また、植生調査の結果は植物相調査に反映すると共に、調査範囲内の植生を優占種によって区分し、現存植生図を作成した。

⑤ 調査結果

a. 植物相調査

現地調査の結果、合計で 58 科 187 種の植物が確認された。分類別確認種数を表 7-6-1-20 に示した。

分類別では、シダ植物が 2 科 2 種、双子葉植物離弁花類が 31 科 84 種、双子葉植物合弁花類が 17 科 45 種、单子葉植物が 8 科 56 種で、裸子植物は確認されなかった。

現地調査で確認された種は、大部分が近畿地方の平地から山地で比較的普通に見られる種であった。

事業計画地内は、ウバメガシ等の広葉樹を主体とした植栽林、乾性の草地、人工裸地といった環境となっており、人為的な要素の強い環境である。これらの環境を反映し、セイタカアワダチソウやメリケンカルカヤに代表される外来種は 78 種が確認された。これにより、調査範囲での外来種率（出現種に対する外来種の出現割合）は 41.7% とな

っていた。また、全調査を通して特定外来生物であるナルトサワギクが確認された。

表 7-6-1-20 分類別確認種数（植物相）

分類	5月		7月		10月		合計		主な出現種
	科数	種数	科数	種数	科数	種数	科数	種数	
高等植物	38	99	37	113	45	114	58	187	
シダ植物	0	0	0	0	2	2	2	2	ベニシダ、ミゾシダ
種子植物	38	99	37	113	43	112	56	185	
裸子植物	0	0	0	0	0	0	0	0	—
被子植物	38	99	37	113	43	112	56	185	
双子葉植物	35	75	32	84	36	79	48	129	
離弁花類	24	47	20	53	26	53	31	84	アラカシ、ノイバラ、ヤハズエンドウ、アカメガシワ、ヌルデ、ノランジン等
合弁花類	11	28	12	31	10	26	17	45	トウネズミモチ、ヤエムグラ、オオバコ、ブタクサ、セイタカアワダチソウ等
單子葉植物	3	24	5	29	7	33	8	56	ヤブラン、ツユクサ、イヌムギ、ヨシ、トウジュロ、カヤツリグサ等

b. 植生調査

事業計画地の現存植生を図 7-6-1-5 に示す。

事業計画地の植生は、大きくは 5 タイプに区分される。

植生タイプ毎の特徴は以下のとおりである。

(a) 1 年生草本群落

1 年生草本群落は、クソニンジン群落、アメリカセンダングサ群落、ヒメムカショモギ群落及びオヒゲシバ群落の 4 群落が確認された。

これらの群落は、事業計画地西側の盛土部を中心に分布していた。このうち、事業計画地における面積が最も大きかったのはオヒゲシバ群落で、他の群落については比較的小規模であった。なお、いずれの群落も外来種が優占している群落である。

(b) 多年生広葉草本群落

多年生広葉草本群落は、クズ群落、ヤブガラシ群落、ヨモギ群落及びセイタカアワダチソウ群落の 4 群落が確認された。

これらの群落は、事業計画地西側の盛土部を中心に分布していた。このうち、事業計画地における面積が最も大きかったのはセイタカアワダチソウ群落で、次いでクズ群落が比較的広い範囲で見られたが、他の群落については比較的小規模であった。

(c) 単子葉植物群落

単子葉植物群落は、ヨシ群落の 1 群落のみ確認された。

ヨシ群落は、事業計画地西側の盛土部の南側斜面を中心に分布していた。

(d) その他単子葉植物群落

ヨシ以外の単子葉植物が優占する草本群落で、事業計画地内ではメリケンカルカヤ群落、ススキ群落及びヒメモロコシ群落の3群落が確認された。

これらの群落はいずれも小規模であり、メリケンカルカヤ群落及びヒメモロコシ群落は外来種が優占している群落である。

(e) 植栽樹林群

植栽樹林群は、トウネズミモチ群落及びウバメガシ群落の2群落が確認された。いずれも高木層に常緑広葉樹が分布する植栽林で、トウネズミモチ群落は事業計画地西側及び南側の盛土部を中心に分布しており、ウバメガシ群落は事業計画地西側及び南側の盛土部にのみ分布していた。

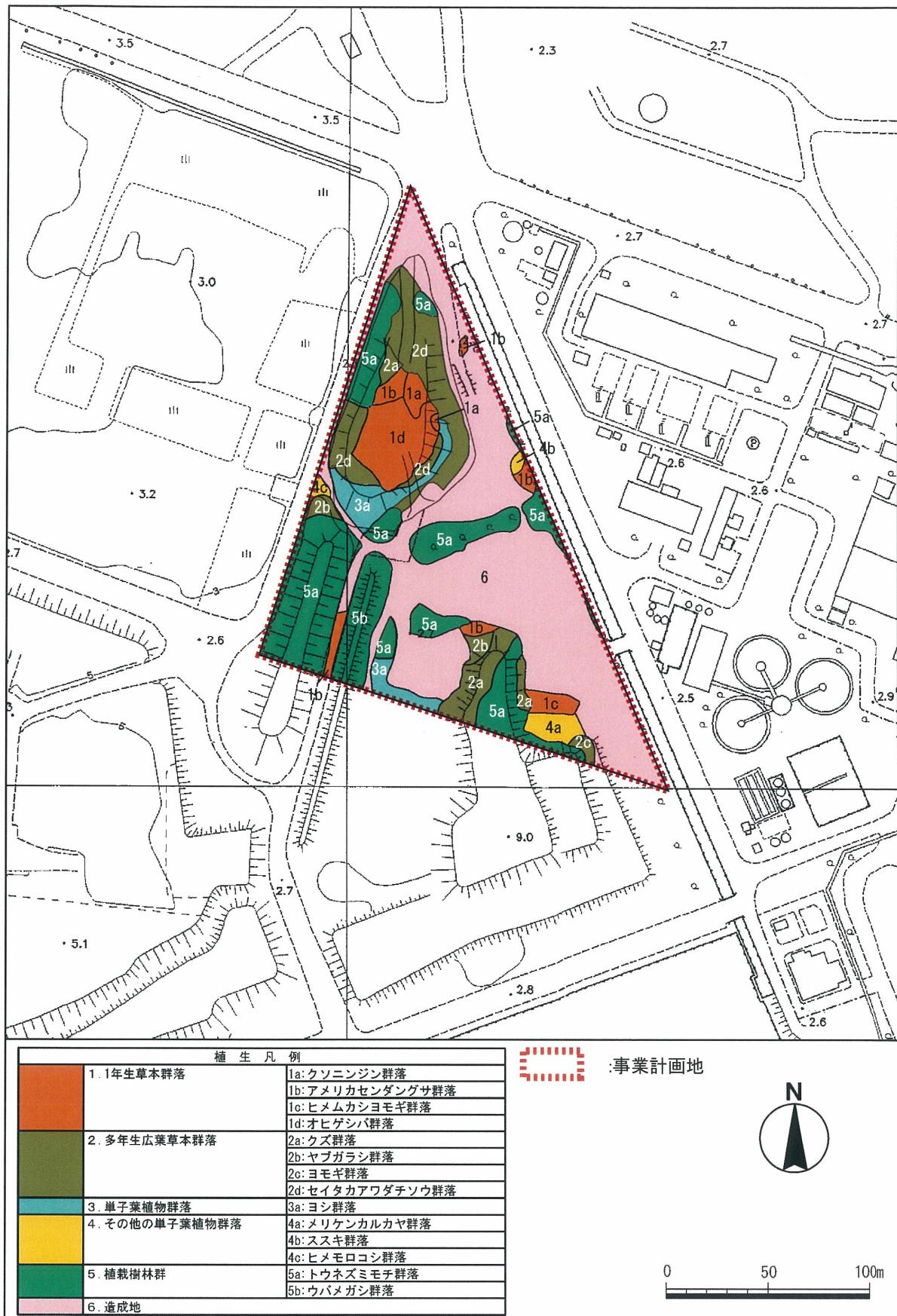


図 7-6-1-5 現存植生図

(3) 注目すべき種とその分布及び生息・生育環境の状況

1) 陸生動物

① 調査地域

「(1) 既存資料調査」、「(2) 現地調査」のとおりである。

② 調査地点

「(1) 既存資料調査」、「(2) 現地調査」のとおりである。

③ 調査時期

「(1) 既存資料調査」、「(2) 現地調査」のとおりである。

④ 調査方法

周辺地域の陸域に生息する動物について、学術上及び希少性の観点から注目すべき種を選定した。注目すべき種の選定となる基準は表 7-6-1-21 に示すとおりである。

表 7-6-1-21 注目すべき種の選定基準一覧

資料 No.	文献・法令の名称	対象分類群	カテゴリー区分【省略形】*
1	「文化財保護法」 (法律第 214 号、昭和 25 年)	哺乳類、鳥類、 爬虫類・両生類、 昆蟲類	・国指定特別天然記念物【特天】 ・国指定天然記念物【国天】 ・府指定天然記念物【府天】
2	「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」 (法律第 75 号、平成 4 年)	哺乳類、鳥類、 爬虫類・両生類、 昆蟲類	・国内希少野生動植物種【国内】 ・国際希少野生動植物種【国際】
3	「レッドリスト二次見直しについて」 (環境省、平成 18~19 年)	哺乳類、鳥類、 爬虫類・両生類、 昆蟲類	・絶滅【絶滅】 ・絶滅危惧 I 類【I 類】 絶滅危惧 IA 類【IA 類】 絶滅危惧 IB 類【IB 類】 ・絶滅危惧 II 類【II 類】 ・準絶滅危惧【準絶】 ・情報不足【情報】 ・絶滅のおそれのある地域個体群【地域】
4	「近畿地区鳥類レッドデータブック」 (京都大学学術出版会、平成 14 年) ※大阪府における絶滅危惧ランク	鳥類	・危機的絶滅危惧【危機】 ・絶滅危惧【絶危】 ・準絶滅危惧【準絶】 ・要注目種【要】 ・繁殖個体群についての判定【繁】 ・越冬個体群についての判定【越】 ・通過個体群についての判定【通】 ・夏期滞在個体群についての判定【夏】
5	「大阪府における保護上重要な野生生物－大阪府レッドデータブック－」 (大阪府、平成 12 年)	哺乳類、鳥類、 爬虫類・両生類、 昆蟲類	・絶滅【絶滅】 ・絶滅危惧 I 類【I 類】 ・絶滅危惧 II 類【II 類】 ・準絶滅危惧【準絶】 ・情報不足【情報】 ・要注目種【要】
6	「堺の環境」 (堺市、平成 20 年)	哺乳類、鳥類、 爬虫類・両生類、 昆蟲類	・絶滅【絶滅】 ・A ランク（最重要保護）【A】 ・B ランク（重要保護）【B】 ・C ランク（要保護）【C】 ・情報不足【情報】 ・要注目【要】

*各動物の注目すべき種一覧の選定基準欄には【】内のカテゴリー区分の省略形を用いた。

a. 哺乳類

表 7-6-1-21 に示した選定基準に該当する注目すべき哺乳類は、表 7-6-1-22 に示すとおりである。なお、種名は「日本産野生生物目録（環境庁編、脊椎動物編）」((財)自然環境研究センター、平成 5 年) に準じた。

表 7-6-1-22 注目すべき哺乳類

No.	科名	種名	確認状況		注目すべき種の選定基準*				
			文献調査	現地調査	1	2	3	5	6
1	モグラ	ヒミズ	○						C
2	ネズミ	カヤネズミ	○						要 C
3	イヌ	キツネ	○						準絶
4	イタチ	テン	○						要
5		イタチ属の一種	○	○					情報 要
6		アナグマ	○						準絶
種類数			6種	1種					

*選定の基準となった資料番号及びカテゴリー区分【省略形】を表す。

現地調査で足跡及び糞が確認されたイタチ属の一種は、別に目撃されたチョウセンイタチの可能性が高いが、「大阪府における保護上重要な野生生物－大阪府レッドデータブック」(大阪府、平成 12 年) には、「府内では全域の平地～山地に広く分布していた」との記述があり、イタチの可能性も否定できないため、イタチ属の一種を注目すべき種として扱うこととした。

また、現地調査でネズミ科の一種が確認されている。これはフィールドサイン調査で巣穴のみが確認された種である。注目すべき哺乳類のカヤネズミは、生態的特徴の一つにイネ科等の植物を使って球形の巣を作る。現地調査ではこのような巣が確認されていないことから、このネズミ科の一種がカヤネズミの可能性は低いため、ネズミ科の注目すべき種は該当なしとした。

現地調査で確認されたイタチ属の一種の現地確認状況は表 7-6-1-23 に、また、確認位置は図 7-6-1-6 に示すとおりである。なお、参考に各図表にチョウセンイタチの情報も記載した。

表 7-6-1-23 注目すべき哺乳類の現地確認状況

調査月	種名	確認状況
1 月	イタチ属の一種	1 箇所で糞を確認。
5 月	チョウセンイタチ (参考)	1 箇所で 1 個体を目撃。
	イタチ属の一種	3 箇所で糞を確認。
7 月	イタチ属の一種	1 箇所で糞を確認。
10 月	イタチ属の一種	1 箇所で糞、2 箇所で足跡を確認。

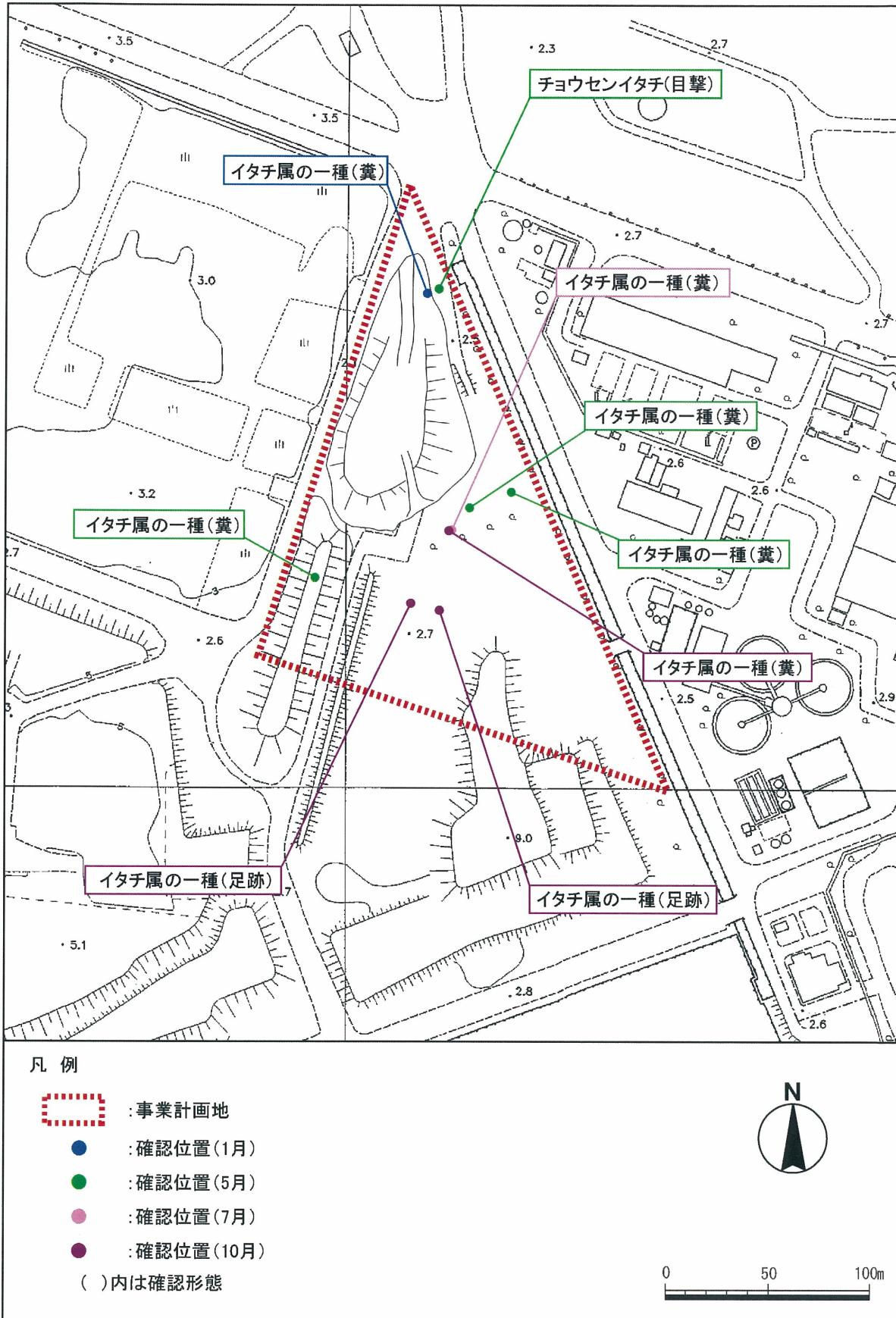


図 7-6-1-6 注目すべき哺乳類の確認位置

b. 鳥類

表 7-6-1-21 に示した選定基準に該当する注目すべき鳥類は、表 7-6-1-24(1)～(3)に示すとおりである。

注目すべき鳥類のうち、現地調査では 9 科 11 種が確認された。現地での確認状況は表 7-6-1-25(1)～(2)に、また、確認位置は図 7-6-1-7(1)～(6)に示すとおりである。

なお、種名は「日本鳥類目録 改訂第 6 版 2000」(日本鳥学会) に準じた。

表 7-6-1-24(1) 注目すべき鳥類

No.	科名	種名	確認状況		注目すべき種の選定基準*					
			文献 調査	現地 調査	1	2	3	4	5	6
1	ミズナギドリ	シロハラミズナギドリ	○				情報		要	
2	カツブリ	カンムリカツブリ	○						要	
3	ウ	カワウ	○	○					要	
4		ウミウ	○					越：準絶	情報	
5		ヒメウ	○				I B類			
6		サンカノゴイ	○				I B類			
7		ヨシゴイ	○				準絶	繁：絶危	II 類	A
8	サギ	オオヨシゴイ	○				I B類			
9		ゴイサギ	○						C	
10		ササゴイ	○						準絶	情報
11		アマサギ	○						C	
12		ダイサギ	○	○					C	
13		チュウサギ	○				準絶		要	要
14		コサギ	○						C	
15		カラシラサギ	○				準絶			
16	カモ	コクガン	○		国天		II 類			
17		アカツクシガモ	○				情報			
18		ツクシガモ	○				I B類	越：絶危	準絶	要
19		オシドリ	○				情報		要	
20		トモエガモ	○				II 類	越：準絶	準絶	
21		アメリカヒドリ	○					越：準絶		
22		シマアジ	○					通：準絶		
23		アカハジロ	○				情報	越：準絶		
24		ホオジロガモ	○					越：準絶		
25		ウミアイサ	○					越：準絶		
26	タカ	ミサゴ	○	○			準絶	通：絶危	要	要
27		ハチクマ	○				準絶	繁：危機	II 類	A
28		トビ	○	○						情報
29		オオタカ	○		国内		準絶	繁：準絶	II 類	A
30		ツミ	○					繁：準絶	II 類	情報
31		ハイタカ	○				準絶		要	C
32		ノスリ	○					越：絶危	要	C
33		サシバ	○				II 類	繁：絶危	準絶	A
34		クマタカ	○		国内		I B類	繁：絶危	I 類	
35		チュウヒ	○				I B類	越：危機	II 類	A
36	ハヤブサ	ハヤブサ	○		国内		II 類	通：準絶	要	要
37		コチョウゲンボウ	○					越：危機	II 類	
38		チョウゲンボウ	○	○				越：絶危	準絶	要
39	キジ	ウズラ	○				準絶	越：絶危	I 類	
40		ヤマドリ	○					準絶		要

*選定の基準となった資料番号及びカテゴリー区分【省略形】を表す。

表 7-6-1-24(2) 注目すべき鳥類

No.	科名	種名	確認状況		注目すべき種選定基準*					
			文献調査	現地調査	1	2	3	4	5	6
41	キジ	キジ	○							C
42	クイナ	クイナ	○					越: 準絶	II類	A
43		ヒクイナ	○				II類	繁: 絶危	II類	A
44		オオバン	○					繁: 絶危 越: 絶危	準絶	
45	タマシギ	タマシギ	○					繁: 絶危 越: 絶危	II類	A
46	チドリ	コチドリ	○	○				繁: 絶危 越: 絶危	II類	C
47		イカルチドリ	○					繁: 絶危 越: 絶危	II類	A
48		シロチドリ	○					繁: 絶危 越: 準絶	II類	A
49		メダイチドリ	○					通: 絶危	準絶	
50		オオメダイチドリ	○					通: 危機	準絶	
51		ムナグロ	○					通: 絶危	準絶	
52		ダイゼン	○					通: 絶危	準絶	
53		ケリ	○	○					要	C
54		タゲリ	○					越: 絶危	準絶	
55	シギ	キョウギヨンギ	○					通: 絶危	準絶	
56		トウネン	○					通: 絶危	準絶	C
57		ヒバリシギ	○					通: 危機	準絶	
58		オジロトウネン	○					越: 危機	準絶	
59		ウズラシギ	○					通: 絶危	準絶	
60		ハマシギ	○					越: 絶危	準絶	C
61		サルハマシギ	○					通: 危機	準絶	
62		コオバシギ	○					通: 危機	準絶	
63		オバシギ	○					通: 危機	準絶	
64		ミュビシギ	○					通: 危機	準絶	
65		ヘラシギ	○				I A類		要	
66		エリマキシギ	○					通: 危機	準絶	
67		キリアイ	○					通: 危機	準絶	
68		ツルシギ	○					通: 危機	準絶	B
69		アカアシシギ	○				II類	通: 絶危	準絶	
70		コアオアシシギ	○					通: 危機	準絶	
71		アオアシシギ	○					通: 絶危	準絶	
72		クサシギ	○					越: 絶危	準絶	B
73		タカブシギ	○					通: 絶危	準絶	B
74		キアシシギ	○					通: 絶危	準絶	
75		イソシギ	○					夏: 絶危 越: 絶危	準絶	
76		ソリハシシギ	○					通: 絶危	準絶	
77		オグロシギ	○					通: 危機	準絶	
78		オオソリハシシギ	○					通: 絶危	準絶	
79		ダイシャクシギ	○						要	
80		ホウロクシギ	○				II類		要	
81		チュウシャクシギ	○					通: 絶危	準絶	
82		ヤマシギ	○					越: 絶危	準絶	
83		タシギ	○					越: 準絶	準絶	C
84		チュウジシギ	○					通: 絶危	準絶	
85		オオジシギ	○					準絶	通: 絶危	準絶
86	セイタカシギ	セイタカシギ	○				II類			
87	ツバメチドリ	ツバメチドリ	○				II類	通: 危機	II類	A
88	カモメ	シロカモメ	○					越: 準絶		
89		ズグロカモメ	○					II類	越: 危機	準絶
90		ハジロクロハラアジサシ	○					通: 準絶		

※選定の基準となった資料番号及びカテゴリー区分【省略形】を表す。

表 7-6-1-24(3) 注目すべき鳥類

No.	科名	種名	確認状況		注目すべき種選定基準*					
			文献調査	現地調査	1	2	3	4	5	6
91	カモメ	コアジサシ	○	○		国際	II類	繁：危機	II類	A
92	ハト	アオバト	○						要	
93	カッコウ	ジュウイチ	○					通：準絶		
94		カッコウ	○						情報	B
95		ツツドリ	○					繁：準絶	準絶	
96		ホトトギス	○					繁：絶危	準絶	C
97		トラフズク	○					越：絶危	II類	A
98	フクロウ	コミミズク	○					越：絶危	II類	A
99		コノハズク	○					通：準絶	情報	
100		オオコノハズク	○					越：準絶	情報	
101		アオバズク	○					繁：絶危	II類	B
102		フクロウ	○					繁：絶危 越：絶危	II類	B
103	ヨタカ	ヨタカ	○				II類	繁：絶危	II類	B
104	カワセミ	ヤマセミ	○					繁：絶危	II類	
105		アカショウビン	○					越：絶危		
106		カワセミ	○					通：準絶		
107	ブッポウソウ	ブッポウソウ	○				I B類			
108	キツツキ	アリスイ	○					越：準絶	準絶	
109		アオゲラ	○					繁：準絶	準絶	
110		アカゲラ	○					越：準絶		
111		ヒバリ	○	○						C
112	サンショウクイ	サンショウクイ	○				II類	繁：絶危	II類	B
113	モズ	アカモズ	○				I B類			
114	カワガラス	カワガラス	○					繁：絶危	準絶	絶滅
115	ミソサザイ	ミソサザイ	○					越：絶危		
116	ツグミ	ノゴマ	○					繁：準絶	II類	
117		コルリ	○					通：準絶		
118		トラツグミ	○					要		
119		クロツグミ	○					繁：絶危	II類	
120		ヤブサメ	○							C
121	ウグイス	コヨシキリ	○					通：準絶		
122		オオヨシキリ	○	○				繁：準絶	準絶	C
123		センダイムシクイ	○					繁：絶危	準絶	
124		セッカ	○	○				準絶		C
125		キビタキ	○							C
126	ヒタキ	オオルリ	○						準絶	C
127		エゾビタキ	○					通：準絶		C
128		コサメビタキ	○					繁：準絶	情報	
129	カササギヒタキ	サンコウチョウ	○					繁：準絶	準絶	C
130	ツリスガラ	ツリスガラ	○						準絶	
131	シジュウカラ	コガラ	○						準絶	
132	ホオジロ	ホオアカ	○					越：絶危	準絶	
133		ノジコ	○					準絶	通：準絶	
134		クロジ	○						準絶	
135		オオジュリン	○						要	
136	アトリ	コイカル	○					越：準絶		
137	ムクドリ	コムクドリ	○					通：準絶		
種類数			137種	11種						

※選定の基準となった資料番号及びカテゴリー区分【省略形】を表す。

表 7-6-1-25(1) 注目すべき鳥類の現地確認状況

調査月	種名	No.*	確認状況
1月	カワウ	1-1	ラインセンサスにおいて、飛翔中の1個体を確認。
		1-2	ポイントセンサスにおいて、飛翔中の1個体を確認。
		1-3	ポイントセンサスにおいて、飛翔中の1個体を確認。
		1-4	任意観察において、飛翔中の1個体を確認。
	トビ	2-1	ラインセンサスにおいて、飛翔中の1個体を確認。
		2-2	ポイントセンサスにおいて、飛翔中の1個体を確認。
	チョウゲンボウ	3	任意観察において、飛翔中の1個体を確認。
	ヒバリ	4	任意観察において、飛翔中の1個体を確認。
4月	カワウ	1-1	ラインセンサスにおいて、飛翔中の1個体を確認。
		1-2	ラインセンサスにおいて、飛翔中の1個体を確認。
		1-3	ポイントセンサスにおいて、飛翔中の1個体を確認。
		1-4	任意観察において、飛翔中の1個体を確認。
	コチドリ	2	任意観察において、飛翔中の2個体を確認。
	ケリ	3-1	ラインセンサスにおいて、飛翔中の1個体を確認。
		3-2	ポイントセンサスにおいて、飛翔中の1個体を確認。
		3-3	ポイントセンサスにおいて、飛翔中の2個体を確認。
		3-4	任意観察において、飛翔中の1個体を確認。
	ヒバリ	4	調査期間中、草地で常時5個体程度を確認。
	セッカ	5-1	ラインセンサスにおいて、鳴き声を確認。
		5-2	任意観察において、鳴き声を確認。
5月	カワウ	1-1	ラインセンサスにおいて、飛翔中の1個体を確認。
		1-2	ポイントセンサスにおいて、飛翔中の1個体を確認。
		1-3	任意観察において、飛翔中の1個体を確認。
	ダイサギ	2	任意観察において、飛翔中の1個体を確認。
	コチドリ	3	任意観察において、地上で1個体を確認。
	ケリ	4	調査期間中、事業計画地内外の広範囲で常時2~4個体を確認。
	コアジサシ	5	任意観察において、飛翔中の4個体を確認。
	ヒバリ	6-1	調査期間中、草地で常時5個体程度を確認。
		6-2	任意観察において、1箇所で営巣を確認。
	オオヨシキリ	7-1	ラインセンサスにおいて、草地で2個体を確認。
		7-2	ラインセンサスにおいて、草地で1個体を確認。
		7-3	ラインセンサスにおいて、草地で1個体を確認。
		7-4	ポイントセンサスにおいて、草地で1個体を確認。
		7-5	ポイントセンサスにおいて、草地で1個体を確認。
		7-6	任意観察において、樹林で1個体を確認。
	セッカ	8-1	ラインセンサスにおいて、鳴き声を確認。
		8-2	ラインセンサスにおいて、飛翔中の1個体を確認。
		8-3	ポイントセンサスにおいて、飛翔中の1個体を確認。
		8-4	ポイントセンサスにおいて、飛翔中の1個体を確認。
		8-5	任意観察において、飛翔中の1個体を確認。

*No.は各調査月毎の種別の識別番号で複数例の場合は枝番をふった。

表 7-6-1-25(2) 注目すべき鳥類の現地確認状況

調査月	種名	No. *	確認状況
6月	カワウ	1-1	ポイントセンサスにおいて、飛翔中の1個体を確認。
		1-2	任意観察において、飛翔中の1個体を確認。
	ダイサギ	2	任意観察において、飛翔中の1個体を確認。
	コチドリ	3-1	ポイントセンサスにおいて、飛翔中の2個体を確認。
		3-2	任意観察において、飛翔中の3個体を確認。
	ケリ	4	任意観察において、鳴き声を確認。
	ヒバリ	5	調査期間中、草地で常時5個体程度を確認。
	オオヨシキリ	6-1	ラインセンサスにおいて、広葉樹林で1個体を確認。
		6-2	ラインセンサスにおいて、広葉樹林で1個体を確認。
		6-3	ポイントセンサスにおいて、草地で1個体を確認。
	セッカ	7-1	ラインセンサスにおいて、鳴き声を確認。
		7-2	ラインセンサスにおいて、飛翔中の1個体を確認。
		7-3	ラインセンサスにおいて、飛翔中の1個体を確認。
		7-4	ポイントセンサスにおいて、飛翔中の1個体を確認。
		7-5	任意観察において、飛翔中の1個体を確認。
7月	カワウ	1	任意観察において、飛翔中の1個体を確認。
	コチドリ	2-1	ラインセンサスにおいて、地上で1個体を確認。
		2-2	ポイントセンサスにおいて、飛翔中の1個体を確認。
		2-3	任意観察において、飛翔中の1個体を確認。
	ケリ	3	ポイントセンサスにおいて、飛翔中の2個体を確認。
	ヒバリ	4-1	ラインセンサスにおいて、飛翔中の1個体を確認。
		4-2	ポイントセンサスにおいて、飛翔中の2個体を確認。
	オオヨシキリ	5	任意観察において、鳴き声を確認。
	セッカ	6	調査期間中、草地で常時2~3個体を確認。
	カワウ	1-1	ラインセンサスにおいて、飛翔中の1個体を確認。
9月		1-2	ポイントセンサスにおいて、飛翔中の1個体を確認。
ミサゴ	2-1	任意観察において、飛翔中の1個体を確認。	
	2-2	任意観察において、餌を持って飛翔中の1個体を確認。2-1と同一個体と考えられる。	
ヒバリ	3	ポイントセンサスにおいて、地上で1個体を確認。	
セッカ	4-1	ポイントセンサスにおいて、飛翔中の1個体を確認。	
	4-2	ポイントセンサスにおいて、草地で1個体を確認。	
	4-3	任意観察において、鳴き声を確認。	
	4-4	ラインセンサスにおいて、飛翔中の1個体を確認。	
オオヨシキリ	5	任意観察において、1箇所で古巣を確認。	

*No.は各調査月毎の種別の識別番号で複数例の場合は枝番をふった。

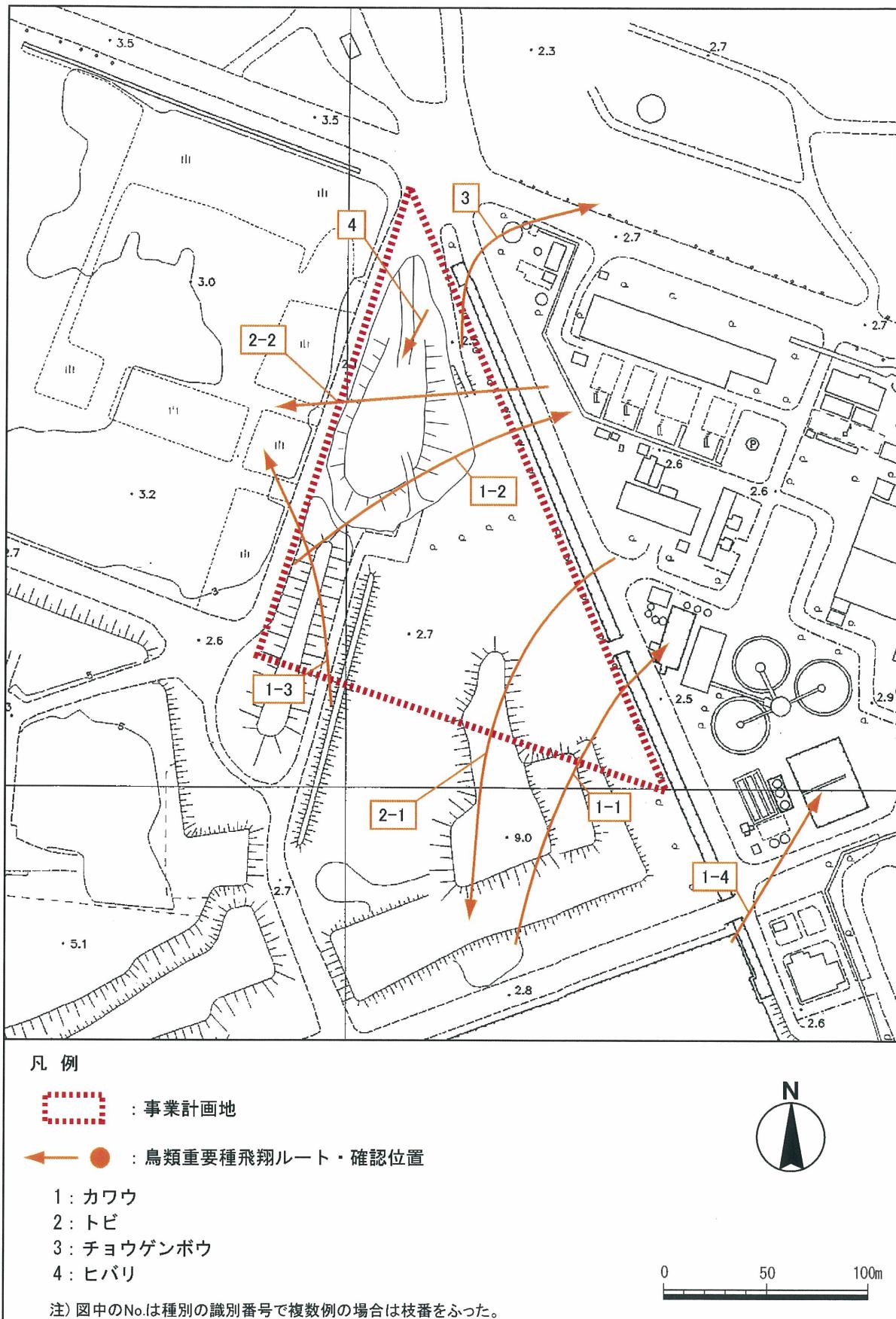
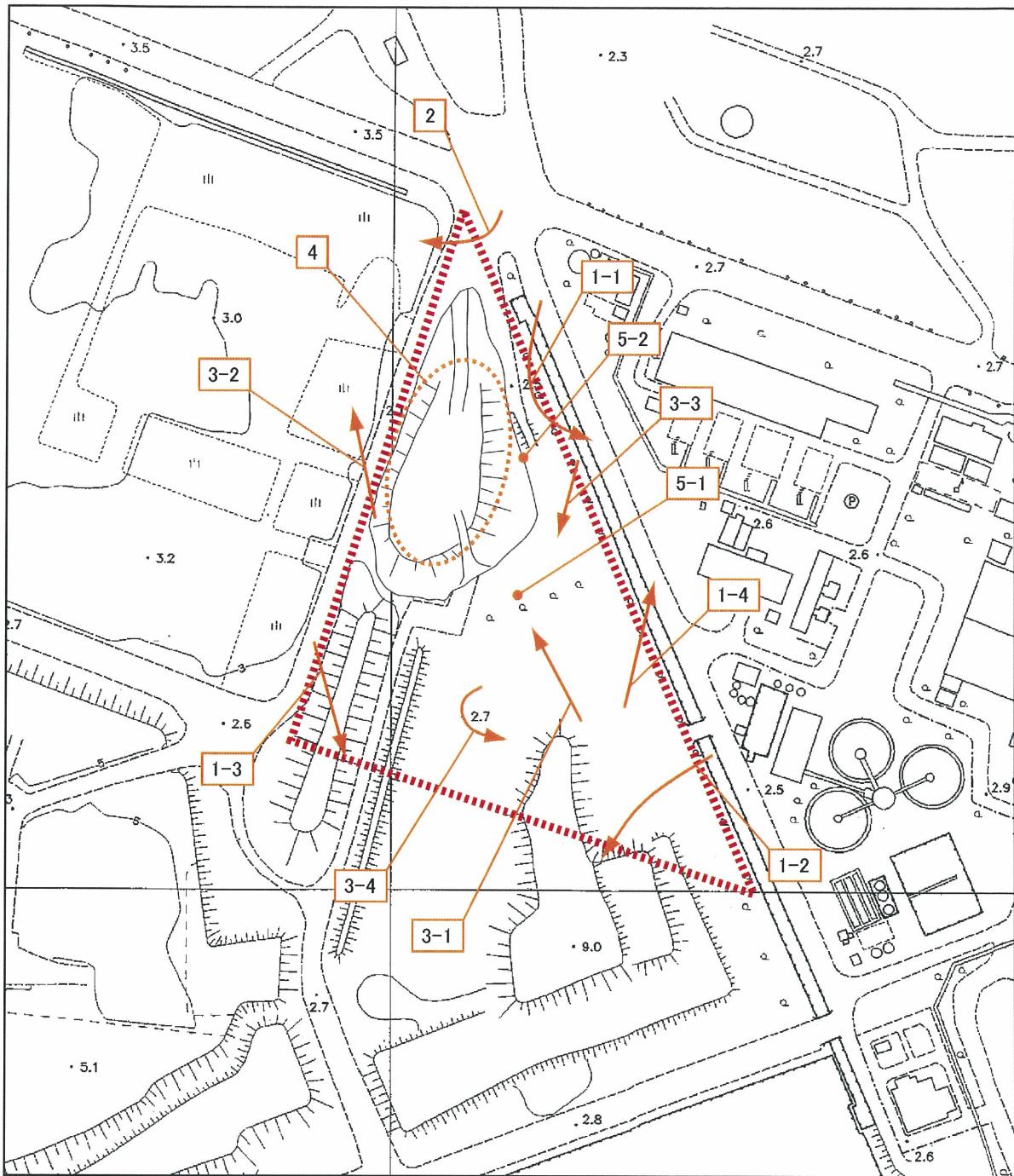


図 7-6-1-7(1) 注目すべき鳥類の確認位置 (平成 20 年 1 月)



凡 例



: 事業計画地



: 鳥類重要種飛翔ルート・確認位置

- | | |
|----------|---------|
| 1 : カワウ | 5 : セッカ |
| 2 : コチドリ | |
| 3 : ケリ | |
| 4 : ヒバリ | |

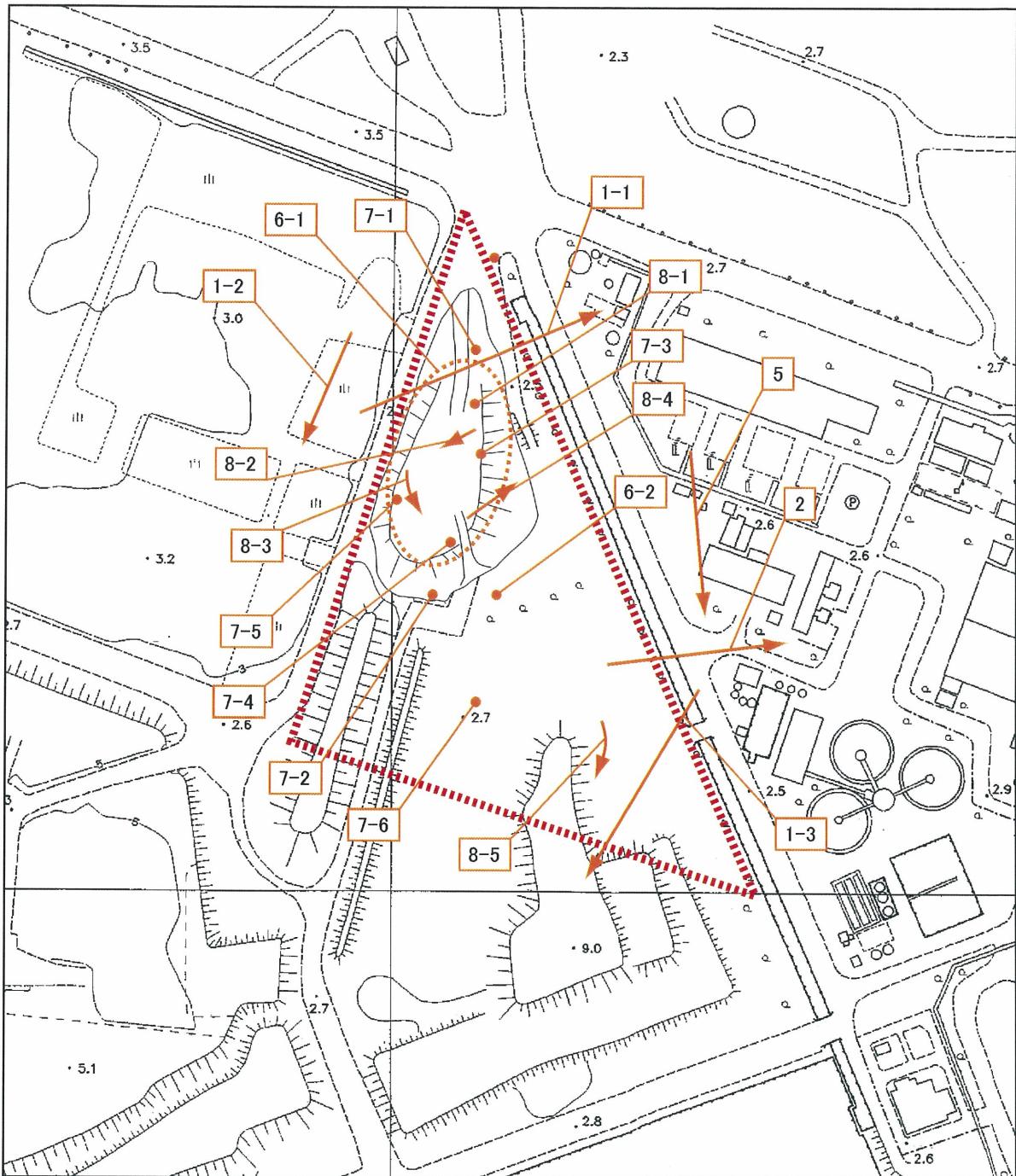
注) ヒバリは、調査期間中草地で
常時5個体程度が確認された。



0 50 100m

注) 図中のNo.は種別の識別番号で複数例の場合は枝番をふった。

図 7-6-1-7(2) 注目すべき鳥類の確認位置 (平成 20 年 4 月)



凡 例



: 事業計画地



: 鳥類重要種飛翔ルート・確認位置

- 1 : カワウ
- 2 : ダイサギ
- 3 : コチドリ
- 5 : コアジサシ
- 6 : ヒバリ
- 7 : オオヨシキリ
- 8 : セッカ

注) ケリは、調査期間中、対象事業計画地内外の広範囲で常時2~4個体が確認されたため、ケリの識別番号No. 4はプロットしていない。
ヒバリは、調査期間中草地で常時5個体程度が確認された。

注) 図中のNo.は種別の識別番号で複数例の場合は枝番をふつた。



0 50 100m

図 7-6-1-7(3) 注目すべき鳥類の確認位置 (平成 20 年 5 月)

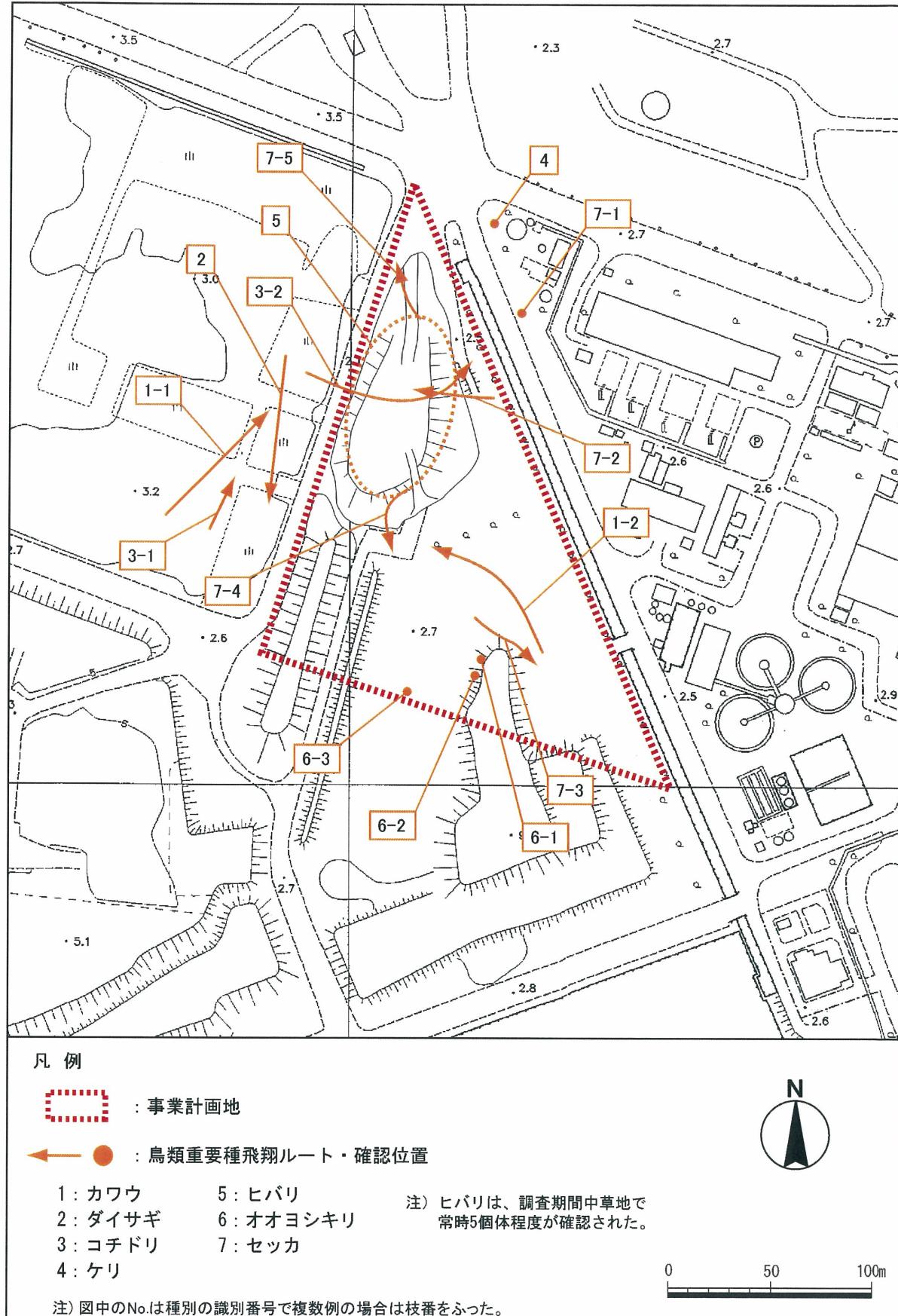


図 7-6-1-7(4) 注目すべき鳥類の確認位置 (平成 20 年 6 月)

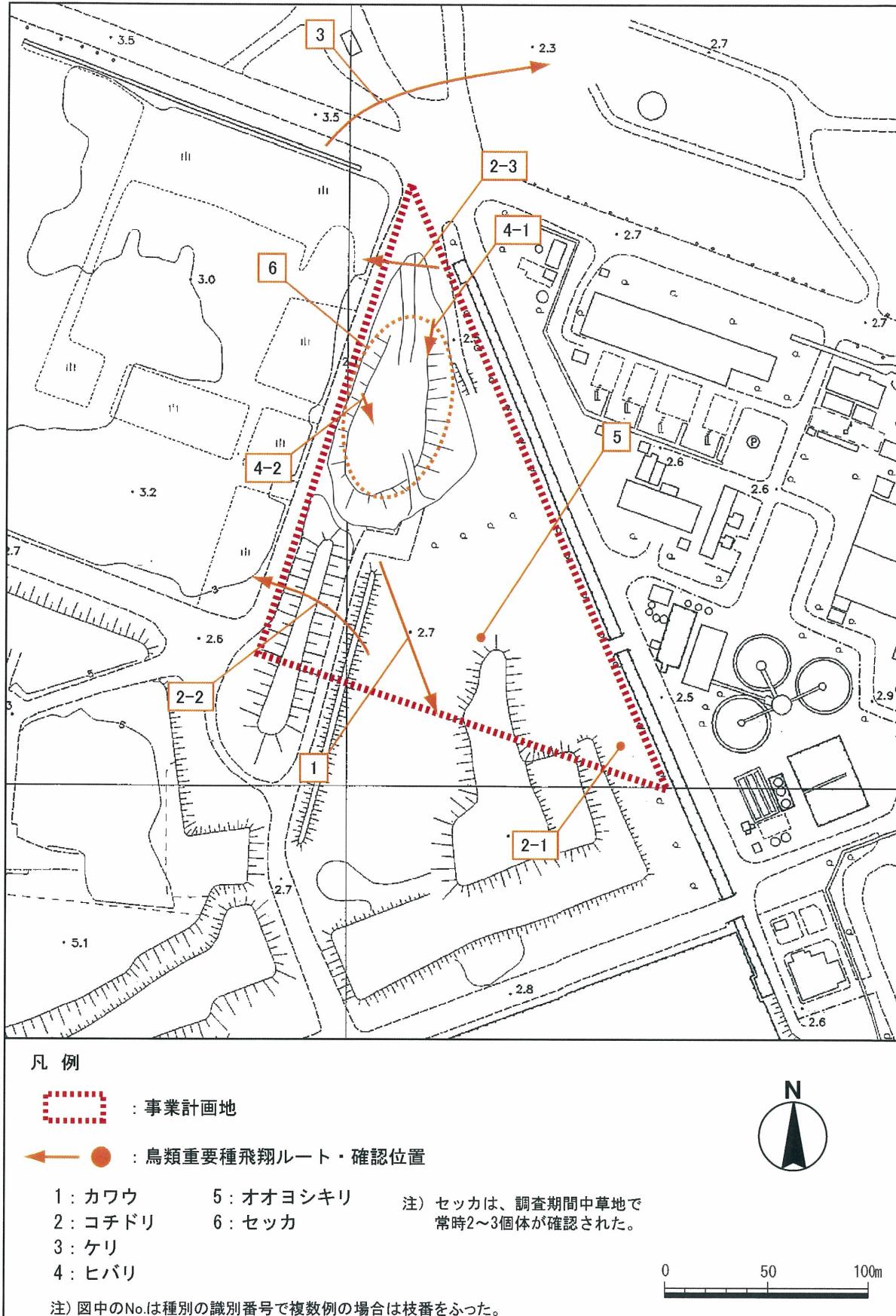


図 7-6-1-7(5) 注目すべき鳥類の確認位置 (平成 20 年 7 月)

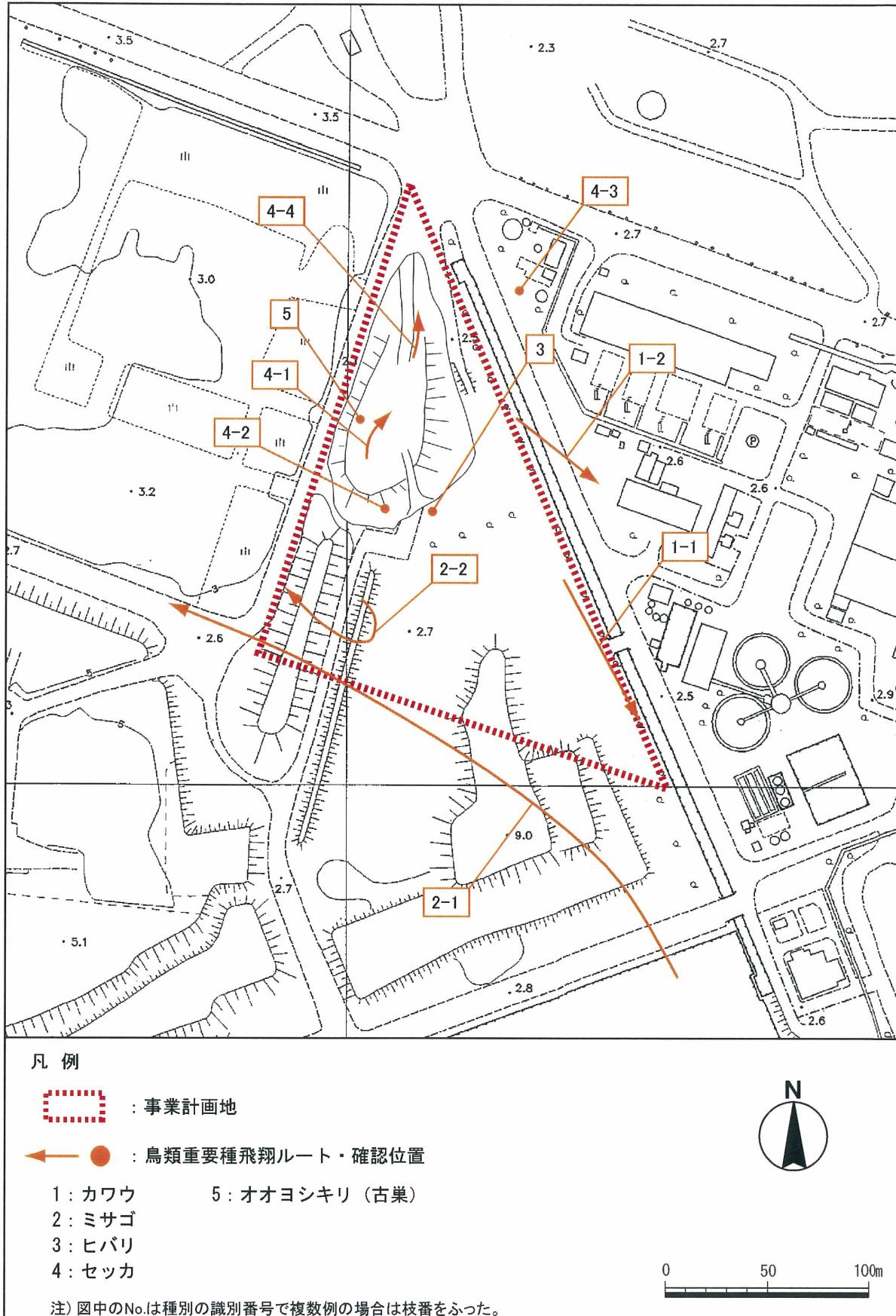


図 7-6-1-7(6) 注目すべき鳥類の確認位置 (平成 20 年 9 月)

c. 爬虫類・両生類

表 7-6-1-21 に示した選定基準に該当する注目すべき爬虫類・両生類は、それぞれ表 7-6-1-26、表 7-6-1-27 に示すとおりである。

なお、種名は「日本産野生生物目録（環境庁編、脊椎動物編）」((財) 自然環境研究センター、平成 5 年) に準じた。

注目すべき爬虫類・両生類のうち、現地調査では爬虫類のトカゲ及びカナヘビが確認された。現地での確認状況は表 7-6-1-28 に、また、確認位置は図 7-6-1-8 に示すとおりである。

表 7-6-1-26 注目すべき爬虫類

No.	科名	種名	確認状況		注目すべき種の選定基準*				
			文献 調査	現地 調査	1	2	3	5	6
1	ウミガメ	アカウミガメ	○			国際	I B 類	I 類	
2	イシガメ	イシガメ	○				情報	要	C
3	スッポン	スッポン	○				情報	情報	情報
4	トカゲ	トカゲ	○	○					要
5	カナヘビ	カナヘビ	○	○					要
6	ヘビ	アオダイショウ	○					要	
7		ヒバカリ	○					情報	B
8		マムシ	○						要
種類数			8 種	2 種					

*選定の基準となった資料番号及びカテゴリー区分【省略形】を表す。

表 7-6-1-27 注目すべき両生類

No.	科名	種名	確認状況		注目すべき種の選定基準 ^{注1}				
			文献 調査	現地 調査	1	2	3	5	6
1	サンショウウオ	カスミサンショウウオ	○				II 類	II 類	A
2		ブチサンショウウオ	○				準絶	準絶	
3	オオサンショウウオ	オオサンショウウオ	○		特天	国際	II 類	II 類	
4	イモリ	イモリ	○				準絶	要	A
5	ヒキガエル	ニホンヒキガエル	○					要	
6	アカガエル	タゴガエル	○						情報
7		ニホンアカガエル	○						B
8		トノサマガエル	○						B
9		トウキョウダルマガエル ^{注2}	○				I B 類	I 類	A
10		ツチガエル	○						要
11	アオガエル	シュレーベルアオガエル	○					要	要
12		カジカガエル	○					要	情報
種類数			12 種	0 種					

注 1) 選定の基準となった資料番号及びカテゴリー区分【省略形】を表す。

注 2) 既存資料では「ダルマガエル」と記載。

表 7-6-1-28 注目すべき爬虫類の現地確認状況

調査月	種名	確認状況
5月	トカゲ	2箇所で合計2個体を確認。
	カナヘビ	3箇所で合計3個体を確認。
7月	カナヘビ	1箇所で合計1個体を確認。

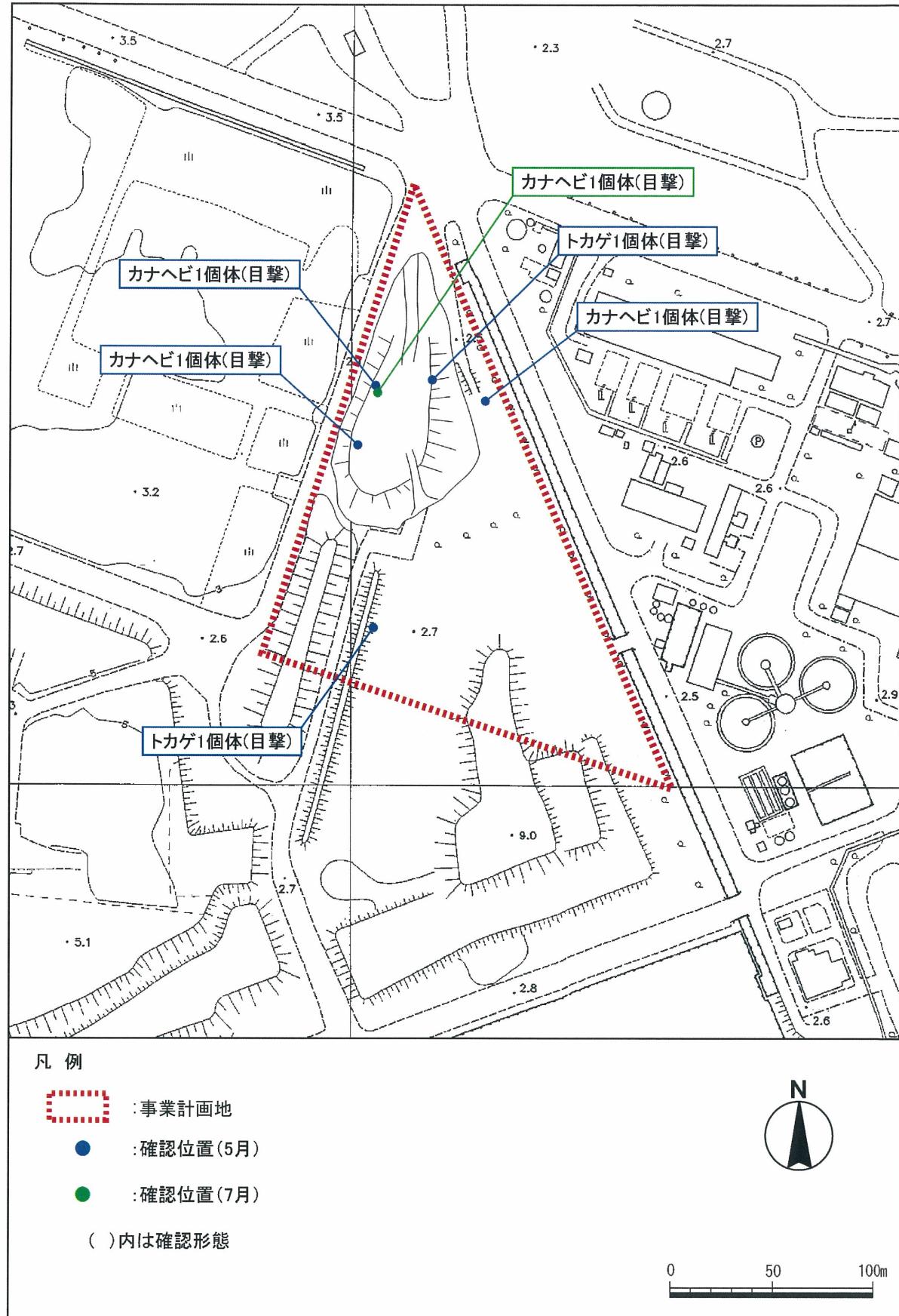


図 7-6-1-8 注目すべき爬虫類の確認位置

d. 昆虫類

表 7-6-1-21 に示した選定基準に該当する注目すべき昆虫類は、表 7-6-1-29(1)～(4) に示すとおりである。なお、種名は「日本産野生生物目録（環境庁編、無脊椎動物編Ⅱ）」（財）自然環境研究センター、平成 7 年)、「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（昆虫編）」（国土交通省、平成 20 年）に準じた。

注目すべき昆虫類のうち、現地調査では 4 科 4 種が確認された。現地での確認状況は表 7-6-1-30 に、また、確認位置は図 7-6-1-9 に示すとおりである。

表 7-6-1-29(1) 注目すべき昆虫類

No.	科名	種名	確認状況		注目すべき種選定基準*				
			文献調査	現地調査	1	2	3	5	6
1	イトトンボ	ホソミイトトンボ	○						A
2		ベニイトトンボ	○				II 類	準絶	A
3		モートンイトトンボ	○				準絶		A
4		キイトトンボ	○						C
5	アオイトトンボ	コバネアオイトトンボ	○				I 類	準絶	A
6		オツネントンボ	○						B
7	カワトンボ	ハグロトンボ	○						C
8		ミヤマカワトンボ	○						C
9		アサヒナカワトンボ	○						C
10		アオハダトンボ	○				II 類		
11	ムカシトンボ	ムカシトンボ	○				準絶		
12	ムカシヤンマ	ムカシヤンマ	○				準絶	A	
13	サナエトンボ	ヤマサンエ	○						B
14		キイロサンエ	○				準絶	A	
15		ホンサンエ	○				準絶	B	
16		アオサンエ	○				準絶		
17		オナガサンエ	○						A
18		オグマサンエ	○				II 類		A
19		オジロサンエ	○						C
20		フタスジサンエ	○				準絶		C
21	ヤンマ	オオルリボシヤンマ	○				準絶		A
22		ネアカヨシヤンマ	○				準絶	II 類	A
23		アオヤンマ	○				II 類		A
24		マルタンヤンマ	○				II 類		B
25		コシボソヤンマ	○						B
26		カトリヤンマ	○						B
27		サラサヤンマ	○				準絶		B
28		ミルンヤンマ	○						C
29	エゾトンボ	トラフトンボ	○						A
30		ハネビロエゾトンボ	○				準絶	準絶	A
31		タカネトンボ	○						B
32		エゾトンボ	○						A
33		オオエゾトンボ	○						要
34	トンボ	ベッコウトンボ	○				I 類	絶滅	絶滅
35		ヨツボシトンボ	○						A
36		ハッショウトンボ	○				準絶		A
37		シオヤトンボ	○						B
38		キトンボ	○						A

*選定の基準となった資料番号及びカテゴリー区分【省略形】を表す。

表 7-6-1-29(2) 注目すべき昆虫類

No.	科名	種名	確認状況		注目すべき種選定基準*				
			文献調査	現地調査	1	2	3	5	6
39	トンボ	ナニワトンボ	○				II類	準絶	A
40		マイコアカネ	○	○					A
41		マダラナニワトンボ	○				I類	絶滅	絶滅
42		ヒメアカネ	○						A
43		ミヤマアカネ	○						絶滅
44		ネキトンボ	○					準絶	A
45		オオキトンボ	○				I類	I類	絶滅
46		コノシメトンボ	○						C
47	オオゴキブリ	オオゴキブリ	○						要
48	ヒメクロゴキブリ	ヒメクロゴキブリ	○						要
49	ゴキブリ	ヤマトゴキブリ	○					要	情報
50	チャバネゴキブリ	ツチゴキブリ	○						C
51	カマキリ	ウスバカマキリ	○				I類	A	
52		ヒナカマキリ	○					準絶	B
53	クサヒバリ	キンヒバリ	○						C
54	スズムシ	スズムシ	○						C
55	クマスマズムシ	クマスマズムシ	○						B
56	カンタン	カンタン	○						要
57	キリギリス	カヤキリ	○					準絶	B
58		ササキリモドキ	○						C
59	バッタ	クルマバッタ	○					要	B
60		イナゴモドキ	○				II類	A	
61		セグロバッタ	○					準絶	B
62		ショウリョウバッタモドキ	○						C
63	ヒシバッタ	ニセハネナガヒシバッタ	○						C
64		ヒメヒシバッタ	○						情報
65	ナナフシ	トゲナナフシ	○						要
66	グンバイウンカ	ハウチワウンカ	○				準絶		C
67	セミ	ハルゼミ	○						C
68		チッチゼミ	○						B
69		ミンミンゼミ	○						C
70		ニイニイゼミ	○						C
71		ヒグラシ	○						C
72	キジラミ	エノキカイガラキジラミ	○				準絶		A
73	イトアメンボ	イトアメンボ	○				II類		A
74	アメンボ	オオアメンボ	○						C
75	コオイムシ	コオイムシ	○				準絶		B
76		タガメ	○				II類	II類	絶滅
77	タイコウチ	タイコウチ	○						C
78	ミズムシ	オオミズムシ	○				準絶		C
79	コバンムシ	コバンムシ	○				II類	I類	絶滅
80	キンカメムシ	オオキンカメムシ	○						要
81		チャイロカメムシ	○						要
82	カメムシ	ウシカメムシ	○						要
83	ツノカメムシ	エサキモンキツノカメムシ	○						要
84	ヘビトンボ	ヘビトンボ	○						要
85		クロスジヘビトンボ	○						要
86		ヤマトクロスジヘビトンボ	○						要
87	ラクダムシ	ラクダムシ	○						情報
88	カマキリモドキ	キカマキリモドキ	○						B
89		ヒメカマキリモドキ	○						C
90	ツノトンボ	ツノトンボ	○						C

※選定の基準となった資料番号及びカテゴリー区分【省略形】を表す。

表 7-6-1-29(3) 注目すべき昆虫類

No.	科名	種名	確認状況		注目すべき種選定基準*				
			文献調査	現地調査	1	2	3	5	6
91	ハンミョウ	エリザハンミョウ	○						B
92		カワラハンミョウ	○				II類	絶滅	
93		ルイスハンミョウ	○				II類	絶滅	絶滅
94		コハンミョウ	○	○					C
95	オサムシ	ヒヨウタンゴミムシ	○					II類	B
96		オオヒヨウタンゴミムシ	○				準絶	I類	
97		キバナガミズギワゴミムシ	○					I類	
98		ウミミズギワゴミムシ	○					I類	
99	コツブゲンゴロウ	ムツボシツヤコツブゲンゴロウ	○					情報	
100	ゲンゴロウ	コガタノゲンゴロウ	○				I類	絶滅	絶滅
101		マルガタゲンゴロウ	○				準絶	II類	A
102	ガムシ	コガタガムシ	○						絶滅
103	ミズスマシ	ミズスマシ	○						C
104	シデムシ	ツシマヒラタシデムシ	○	○				準絶	C
105		クロシデムシ	○						要
106	クワガタムシ	マメクワガタ	○						B
107		ネブトクワガタ	○						B
108		ヒラタクワガタ	○						C
109	コガネムシ	ヤマトアオドウガネ	○						C
110		アカマダラコガネ	○				情報	II類	
111		カブトムシ	○						C
112		コカブトムシ	○						B
113	タマムシ	ヤマトタマムシ	○						C
114	コメツキムシ	ウバタマコメツキ	○						C
115	ホタル	ヒメボタル	○					準絶	A
116		ゲンジボタル	○					要	B
117		ヘイケボタル	○						A
118		クロマドボタル	○						C
119	テントウムシ	ジュウクホシテントウ	○					準絶	B
120		ジュウサンホシテントウ	○					準絶	B
121		カメノコテントウ	○						C
122	ツチハンミョウ	ヒラズゲンセイ	○						要
123	カミキリムシ	モモグロハナカミキリ	○					準絶	
124		ムネマダラトラカミキリ	○					準絶	
125		セダカコブヤハズカミキリ	○					準絶	
126		ヒグナガヒメルリカミキリ	○					準絶	
127		アサカミキリ	○				II類		
128		ヨツボシカミキリ	○				II類		B
129	スズメバチ	コアシナガバチ	○						C
130		クロスズメバチ	○						C
131	ミツバチ	クロマルハナバチ	○						B
132	トビケラ	ツマグロトビケラ	○						C
133	アシエダトビケラ	コバンントビケラ	○						C
134	ミノガ	チャミノガ	○						C
135	セセリチョウ	アオバセセリ	○					準絶	A
136		ダイミョウセセリ	○						C
137		ミヤマセセリ	○						A
138		ホソバセセリ	○						B
139		ギンイチモンジセセリ	○				準絶	II類	絶滅
140		オオチャバネセセリ	○						B

※選定の基準となった資料番号及びカテゴリー区分【省略形】を表す。

表 7-6-1-29(4) 注目すべき昆虫類

No.	科名	種名	確認状況		注目すべき種選定基準*				
			文献調査	現地調査	1	2	3	5	6
141	セセリチョウ	キマダラセセリ	○						C
142		コチャバネセセリ	○	○					C
143	アゲハチョウ	ジャコウアゲハ	○						B
144		カラスアゲハ	○						C
145		オナガアゲハ	○						A
146	シロチョウ	ツマグロキチョウ	○				II類	I類	A
147		ツマキチョウ	○						C
148		スジグロシロチョウ	○						C
149	シジミチョウ	ミズイロオナガシジミ	○						B
150		アカシジミ	○						B
151		ゴイシシジミ	○						A
152		シルビアシジミ	○				I類	I類	絶滅
153		ウラナミアカシジミ	○				II類		
154		ムラサキツバメ	○						C
155		ミドリシジミ	○					準絶	A
156		トラフシジミ	○						C
157		サカハチチョウ	○						A
158	タテハチョウ	ウラギンスジヒヨウモン	○				準絶	準絶	
159		スミナガシ	○					準絶	A
160		ヒオドシチョウ	○						B
161		オオムラサキ	○				準絶	準絶	
162		ミドリヒヨウモン	○						B
163		イチモンジチョウ	○						B
164		メスグロヒヨウモン	○						A
165		コムラサキ	○						C
166		イシガケチョウ	○						C
167	ジャノメチョウ	ジャノメチョウ	○						B
168		クロヒカゲ	○						C
169		ヒカゲチョウ	○						C
170		コジャノメ	○						C
171		サトキマダラヒカゲ	○						C
172	ヤママユガ	オナガミズアオ	○						B
173		ウスタビガ	○						C
174		シンジュサン	○						C
175		オオミズアオ	○						C
176	スズメガ	コウチスズメ	○				準絶		
177		クロホウジャク	○						C
178	ヤガ	キシタバ	○						C
179		オオトモエ	○						C
種類数			179種	4種					

※選定の基準となった資料番号及びカテゴリー区分【省略形】を表す。

表 7-6-1-30 注目すべき昆虫類の現地確認状況

調査月	種名	確認状況
5月	コチャバネセセリ	任意採集により1個体を確認した。
7月	マイコアカネ	任意採集により1個体を確認した。
	コハシミョウ	任意採集により1個体を確認した。
	ツシマヒラタシデムシ	樹林地のライトトラップにより1個体を確認した。
		草地のベイトトラップにより5個体を確認した。

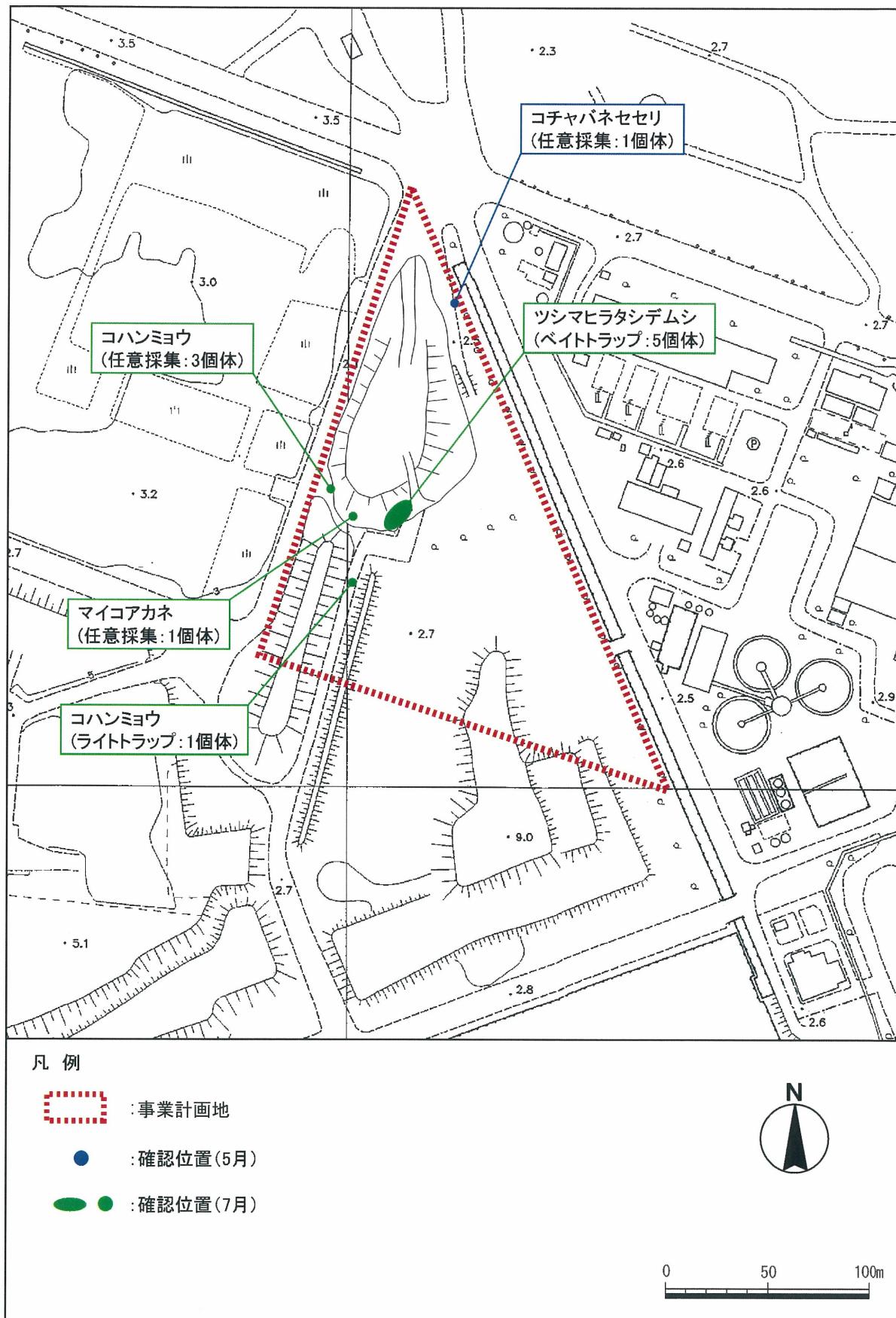


図 7-6-1-9 注目すべき昆虫類の確認位置

2) 陸生植物

① 調査地域

「(1) 既存資料調査」、「(2) 現地調査」のとおりである。

② 調査地点

「(1) 既存資料調査」、「(2) 現地調査」のとおりである。

③ 調査時期

「(1) 既存資料調査」、「(2) 現地調査」のとおりである。

④ 調査方法

周辺地域の陸域に生育する植物について、学術上及び希少性の観点から注目すべき種を選定した。注目すべき種の選定となる基準は表 7-6-1-31 に示すとおりである。

表 7-6-1-31 注目すべき陸生植物の選定基準一覧

資料 No.	文献・法令の名称	カテゴリー区分【省略形】*
1	「文化財保護法」 (法律第 214 号、昭和 25 年)	・国指定特別天然記念物【特天】 ・国指定天然記念物【国天】 ・府指定天然記念物【府天】
2	「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」 (法律第 75 号、平成 4 年)	・国内希少野生動植物種【国内】 ・国際希少野生動植物種【国際】
3	「レッドリスト二次見直しについて」 (環境省、平成 19 年)	・絶滅、野生絶滅【絶滅】 ・絶滅危惧 I 類【I 類】 絶滅危惧 IA 類【IA 類】 絶滅危惧 IB 類【IB 類】 ・絶滅危惧 II 類【II 類】 ・準絶滅危惧【準絶】 ・情報不足【情報】 ・絶滅のおそれのある地域個体群【地域】
4	「改訂・近畿地方の保護上重要な植物 レッドデータブック近畿 2001」 (レッドデータブック近畿研究会、平成 13 年)	・絶滅種【絶滅】 ・絶滅危惧種 A【A】 ・絶滅危惧種 B【B】 ・絶滅危惧種 C【C】 ・準絶滅危惧種【準絶】
5	「大阪府における保護上重要な野生生物－大阪府レッドデータブック－」 (大阪府、平成 12 年)	・絶滅【絶滅】 ・絶滅危惧 I 類【I 類】 ・絶滅危惧 II 類【II 類】 ・準絶滅危惧【準絶】 ・情報不足【情報】 ・要注目種【要】
6	「堺の環境」 (堺市、平成 20 年)	・絶滅【絶滅】 ・A ランク（最重要保護）【A】 ・B ランク（重要保護）【B】 ・C ランク（要保護）【C】 ・情報不足【情報】 ・要注目【要】

*注目すべき種一覧の選定基準欄には【】内のカテゴリー区分の省略形を用いた。

⑤ 調査結果

表 7-6-1-31 に示した選定基準に該当する注目すべき陸生植物は、表 7-6-1-32(1)～(8) に示すとおりである。

なお、種名は「植物目録 1987」(環境庁、昭和 62 年)、「河川水辺の国勢調査のための生物リスト(植物)」(国土交通省、平成 20 年)、「原色日本植物図鑑、草本編 I～III、木本編 I～II」(保育社、昭和 58～59 年改訂版)、「原色日本帰化植物図鑑」(保育社、昭和 58 年改訂版)、「日本水生植物図鑑」(北隆館、昭和 55 年初版) に準じ、既存資料で別名の表記がある場合は()内に示した。

注目すべき陸生植物のうち、現地調査ではユキヤナギ 1 種が確認された。

現地確認状況は表 7-6-1-33 に、また、確認位置は図 7-6-1-10 に示すとおりである。

ただし、ユキヤナギは、確認された場所が本来の自生地である渓流の岩場等とはかけ離れており、また、植栽樹種として庭木や公園等で植えられているため、逸出した可能性も否定できない。これらのことから、ユキヤナギについては、予測、評価及び環境保全対策の対象には取り上げないこととした。

表 7-6-1-32(1) 注目すべき陸生植物

No.	科名	種名	確認状況		注目すべき種選定基準*					
			既存 資料	現地 調査	1	2	3	4	5	6
1	ヒカゲノカズラ	ヒカゲノカズラ	○							B
2		ミズスギ	○							B
3	イワヒバ	イヌカタヒバ	○				II類			
4	ミズニラ	ミズニラ	○				準絶	C	I類	A
5	トクサ	イヌドクサ	○							B
6	ハナヤスリ	コヒロハハナヤスリ	○							B
7		ヒロハハナヤスリ	○					C	II類	
8	キジノオシダ	タカサゴキジノオ	○							B
9	シノブ	シノブ	○							絶滅
10	ミズワラビ	ミズワラビ	○				準絶		II類	
11	イノモトソウ	オオバノハチジョウシダ	○							B
12	チャセンシダ	ホウビシダ	○						II類	
13	オシダ	ツクシヤブソテツ	○				準絶		II類	
14		ツヤナシイノデ	○							B
15		エンシュウベニシダ	○							情報
16		カタイノデ	○							情報
17		コバノカナワラビ	○							情報
18		サカゲイノデ	○							情報
19		ジュウモンジシダ	○							情報
20		ドウリョウイノデ	○							情報
21	ヒメシダ	ヒメシダ	○							情報
22	メシダ	ムサシシケシダ	○							B
23		ナチシケシダ	○							B
24		ミヤマノコギリシダ	○							B
25		コウヤワラビ	○							B
26		ウラボシノコギリシダ	○							情報
27		クサソテツ	○							情報
28		トガリバイヌワラビ	○							情報
29		ヘビノネゴザ	○							情報
30	ウラボシ	アオネカズラ	○					C	準絶	

*選定の基準となった資料番号及びカテゴリー区分【省略形】を表す。

表 7-6-1-32(2) 注目すべき陸生植物

No.	科名	種名	確認状況		注目すべき種選定基準*					
			既存資料	現地調査	1	2	3	4	5	6
31	サンショウモ	サンショウモ	○				準絶	C	I類	A
32	アカウキクサ	アカウキクサ	○				II類	A	絶滅	絶滅
33		オオアカウキクサ	○				II類	準絶	II類	A
34	スギ	コウヤマキ	○						情報	
35	クルミ	オニグルミ	○							絶滅
36	ヤナギ	バッコヤナギ	○						要	C
37		ヨシノヤナギ	○						情報	
38	カバノキ	カワラハンノキ	○						絶滅	
39		ケヤマハンノキ	○						情報	
40	ブナ	ウラジロガシ	○						情報	
41	ブナ	シリブカガシ	○						情報	
42	ブナ	ツクバネガシ	○						情報	
43	ニレ	コバノチョウセンエノキ	○					C	要	
44	クワ	ケグワ	○				準絶	I類		
45	イラクサ	ウワバミソウ	○						情報	
46		オオサンショウソウ	○						情報	
47		ヤマミズ	○						情報	
48	ヤドリギ	ヒノキバヤドリギ	○						情報	
49		マツグミ	○						情報	
50	タデ	サイコクヌカボ	○				II類	C	I類	A
51		ナガバノウナギツカミ	○				準絶	C	準絶	A
52		サデクサ	○					C	準絶	A
53		ヌカボタデ	○				II類	C	II類	
54		ニオイタデ	○					A		絶滅
55		アキノミチヤナギ	○							絶滅
56	ヤマゴボウ	ヤマゴボウ	○							絶滅
57	ハマミズナ	ツルナ	○					要	C	
58	ナデシコ	ハマナデシコ(フジナデシコ)	○					要		
59		カワラナデシコ	○						B	
60	アカザ	ホソバノハマアカザ	○						準絶	
61		カワラアカザ	○						絶滅	
62		オカヒジキ	○						絶滅	
63	モクレン	コブシ	○					C	情報	
64		ホオノキ	○							情報
65	キンポウゲ	フクジュソウ	○					C	I類	
66		ミスマソウ	○				準絶	準絶	I類	
67		ユキワリイチゲ	○						準絶	
68		シロバナハンショウヅル	○					準絶	要	
69		オキナグサ	○				II類	A	I類	
70		ヒキノカサ	○				II類	A	I類	絶滅
71	メギ	メギ	○						準絶	
72		ルイヨウボタン	○						II類	
73	スイレン	ジュンサイ	○						要	B
74		オニバス	○				II類	C	II類	A
75		コウホネ	○						準絶	
76		ヒツジグサ	○							A
77	マツモ	マツモ	○							情報
78	ドクダミ	ハングショウ	○						準絶	
79	ウマノスズクサ	カンアオイ(イズミカンアオイ)	○						要	
80		ホソバウマノスズクサ (アリマウマノスズクサ)	○						準絶	A
81		ウマノスズクサ	○							情報

※選定の基準となった資料番号及びカテゴリー区分【省略形】を表す。

表 7-6-1-32(3) 注目すべき陸生植物

No.	科名	種名	確認状況		注目すべき種選定基準*					
			既存 資料	現地 調査	1	2	3	4	5	6
82	ウマノスズクサ	オオバウマノスズクサ	○							情報
83	ボタン	ヤマシャクヤク	○				準絶	C	I類	
84	オトギリソウ	トモエソウ	○						I類	
85		アゼオトギリ	○				IB類	A	絶滅	A
86	オトギリソウ	ミズオトギリ	○						準絶	C
87	モウセンゴケ	イシモチソウ	○				準絶	C	II類	A
88		モウセンゴケ	○						準絶	B
89		コモウセンゴケ	○					準絶	準絶	A
90	アブラナ	ハタザオ	○							絶滅
91		タチスズシロソウ	○				IB類	A	絶滅	絶滅
92		イヌナズナ	○							B
93		コイヌガラシ	○				準絶	C	情報	A
94	ベンケイソウ	ツメレンゲ	○				準絶	準絶	準絶	A
95		オノマンネングサ	○						情報	
96	ケシ	キケマン	○							情報
97	ユキノシタ	ウメバチソウ	○						要	
98		チャルメルソウ	○						情報	
99		ノリウツギ	○						情報	
100		マルバウツギ	○						情報	
101	バラ	カワラサイコ	○					A	絶滅	
102		コバナワレモコウ	○						I類	
103		ケカマツカ	○						情報	
104		ナンキンナナカマド	○						情報	
105		ミツバツチグリ	○						情報	
106		ニオイイバラ (ヤブイバラ)	○						情報	
107		ヤマイバラ	○						情報	
108		ワレモコウ	○							B
109		ユキヤナギ	○	○				準絶	II類	
110	マメ	モメンヅル	○					A	情報	
111		カワラケツメイ	○						II類	B
112		タヌキマメ	○					C	II類	絶滅
113		ミソナオシ	○						要	絶滅
114		シバハギ	○					A	I類	
115		ミヤマトベラ	○						準絶	
116		ハマエンドウ	○						要	絶滅
117		イヌハギ	○				準絶	A	I類	A
118		マキエハギ	○					C	II類	A
119		ツルフジバカマ	○					A	II類	A
120		クララ	○						情報	
121		フジカンゾウ	○						情報	
122	ハマビシ	ハマビシ	○				IB類	A	I類	
123	ミカン	コカラスザンショウ	○					準絶	準絶	
124		カラスザンショウ	○							情報
125		ツルシキミ	○							情報
126	ヒメハギ	カキノハグサ	○					準絶	要	
127		ヒナノカンザシ	○					B	I類	
128	アワブキ	ヤマビワ	○							A
129	ツリフネソウ	ツリフネソウ	○							情報
130	ニシキギ	ツリバナ	○							情報
131	クロウメモドキ	クマヤナギ	○							情報
132	ジンチョウゲ	コショウノキ	○						準絶	

※選定の基準となった資料番号及びカテゴリー区分【省略形】を表す。

表 7-6-1-312(4) 注目すべき陸生植物

No.	科名	種名	確認状況		注目すべき種選定基準※					
			既存資料	現地調査	1	2	3	4	5	6
133	グミ	コガンピ	○							情報
134		マルバグミ（オオバグミ）	○						要	
135		カツラギグミ	○				IB類	C	準絶	
136		ナツグミ	○							情報
137	スミレ	アケボノスマリ	○					A	I類	
138		ヒゴスマリ	○						要	
139		アギスマリ	○							情報
140		コタチツボスマリ	○							情報
141	ウリ	キカラスウリ	○							B
142		ゴキヅル	○							情報
143	ミソハギ	ミズマツバ	○				II類	C	準絶	A
144	ヒシ	ヒメビシ	○				II類	A	絶滅	
145	アカバナ	アカバナ	○							C
146	アリノトウグサ	オグラノフサモ	○				II類	A	I類	A
147		タチキ	○				準絶	C	I類	
148		フサモ	○					A	情報	
149	ミズキ	ハナイカダ	○							情報
150	ウコギ	ケヤマウコギ	○						準絶	準絶
151		ミヤマウコギ	○						準絶	要
152		ウラグエウコギ	○							情報
153	セリ	ドクゼリ	○					C	II類	
154		ハマゼリ	○						要	絶滅
155		ハマボウフウ	○					C	I類	絶滅
156		カワラボウフウ	○						II類	
157		ムカゴニンジン	○						準絶	A
158		ヒメチドメ	○							情報
159	イチヤクソウ	シャクジョウソウ	○							B
160		マルバイチヤクソウ	○						準絶	I類
161		イチヤクソウ	○							C
162	ツツジ	ミヤコツツジ	○							情報
163	ヤブコウジ	カラタチバナ	○							情報
164		タイミンタチバナ	○							A
165	イソマツ	ハマサジ	○				準絶	C	I類	A
166	ハイノキ	サワフタギ	○							絶滅
167		ニシゴリ（クロミノニシゴリ）	○					A	II類	A
168		ミミズバイ	○							情報
169	マチン	ホウライカズラ	○				準絶			
170	リンドウ	イヌセンブリ	○				II類	C	II類	A
171		センブリ	○							B
172		リンドウ	○							C
173	ミツガシワ	ガガブタ	○				準絶	A	II類	A
174		アザザ	○				準絶	A	絶滅	絶滅
175	キヨウチクトウ	ケティカカズラ	○				準絶			絶滅
176	ガガイモ	フナバラソウ	○				II類	C	I類	
177		タチカモメヅル	○					C	要	A
178		スズサイコ	○				準絶	C	II類	A
179		キジョラン	○						準絶	
180	アカネ	アリドオシ	○							情報
181		キバナカワラマツバ	○							情報
182		コバノニセジュズネノキ	○							B
183		オオキヌタソウ	○						準絶	II類

※選定の基準となった資料番号及びカテゴリー区分【省略形】を表す。

表 7-6-1-32(5) 注目すべき陸生植物

No.	科名	種名	確認状況		注目すべき種選定基準*					
			既存資料	現地調査	1	2	3	4	5	6
184	アカネ	ハクチヨウゲ	○				IB類			
185		カギカズラ	○						要	C
186	ヒルガオ	ハマヒルガオ	○						要	C
187		ハマネナシカズラ	○				II類	A	情報	絶滅
188	クマツヅラ	コムラサキ	○					C	II類	
189	クマツヅラ	ハマゴウ	○						II類	絶滅
190	シソ	ミズトラノオ	○				II類	A	絶滅	絶滅
191	シソ	ヤマジオウ	○						準絶	
192		ミゾコウジュ	○				準絶	C	要	
193		イガタツナミソウ	○						準絶	
194		ナミキソウ	○					A	絶滅	絶滅
195		ホナガタツナミソウ	○							情報
196	ナス	ヤマホオズキ	○				IB類	A	準絶	
197		ハシリドコロ	○						要	
198	ゴマノバグサ	ゴマクサ	○				II類	A	I類	A
199		ウンラン	○					A	絶滅	絶滅
200		オオヒナノウツボ	○						準絶	
201		ヒキヨモギ	○					C	I類	A
202		オオヒキヨモギ	○				II類	準絶	準絶	
203		イヌノフグリ	○				II類	準絶		A
204		カワデシャ	○				準絶	準絶	要	B
205		アブノメ	○							情報
206		クチナシグサ	○							情報
207		サワトウガラシ	○							情報
208	ハマウツボ	ハマウツボ	○				II類	A	絶滅	絶滅
209		ナンバンギセル	○							情報
210	タヌキモ	ホザキノミミカキグサ	○							B
211		イヌタヌキモ	○				準絶		要	C
212		ノタヌキモ	○				II類			A
213	スイカズラ	ウスバヒヨウタンボク	○				II類	準絶	準絶	
214		キンキヒヨウタンボク	○				IB類	準絶	準絶	
215		ソクズ	○							情報
216		ミヤマウグイスカグラ	○							情報
217	オミナエシ	オトコエシ	○							C
218		オミナエシ	○							C
219	キキョウ	ツルギキョウ	○				II類	A	準絶	
220		キキョウ	○				II類	C	準絶	A
221		タニギキョウ	○							情報
222		ツリガネニンジン	○							C
223		ツルニンジン	○							C
224	キク	サワシロギク	○					C	II類	
225		シオン	○				II類			
226		ウラギク	○				II類	準絶	要	絶滅
227		オケラ	○					C		
228		キンバイタウコギ	○							絶滅
229		タウコギ	○							絶滅
230		モリアザミ	○					B	絶滅	
231		リュウノウギク	○							B
232		アキノハハコグサ	○				II類	A	I類	
233		スイラン	○							A
234		オグルマ	○					C	I類	絶滅
235		カセンソウ	○					A	絶滅	絶滅

※選定の基準となった資料番号及びカテゴリー区分【省略形】を表す。

表 7-6-1-32(6) 注目すべき陸生植物

No.	科名	種名	確認状況		注目すべき種選定基準*				
			既存 資料	現地 調査	1	2	3	4	5
236	キク	ホソバニガナ	○				IB類	A	絶滅
237		ヒメヒゴタイ	○				II類	A	絶滅
238		ネコノシタ(ハマグルマ)	○				A	絶滅	
239		アキノキリンソウ	○						C
240		オトコヨモギ	○						情報
241		センボンヤリ	○						C
242		タムラソウ	○						情報
243		ノニガナ	○						C
244		ヤクシソウ	○						情報
245		キセルアザミ	○						C
246		キクタニギク	○			準絶			
247	オモダカ	マルバオモダカ	○			II類	A	I類	A
248		アギナシ	○			準絶	A	I類	絶滅
249		ヘラオモダカ	○						情報
250	トチカガミ	スブタ	○			II類	A	I類	
251		ヤナギスブタ	○					II類	A
252		トチカガミ	○			準絶	C	I類	A
253		ミズオオバコ	○			II類		準絶	A
254		クロモ	○						C
255	ヒルムシロ	イトモ	○			準絶	A	I類	
256		イトクズモ	○			II類	絶滅	I類	
257		アイノコイトモ	○						B
258		ヒルムシロ	○						B
259		フトヒルムシロ	○						B
260		ホソバミズヒキモ	○						C
261	イバラモ	イトトリゲモ	○			準絶	A	I類	A
262		オオトリゲモ	○				A	I類	A
263	ユリ	ニラ	○				A		
264		キバナチゴユリ	○				C	I類	
265		ノカンゾウ	○					I類	A
266		キスゲ(ユウスゲ)	○					I類	絶滅
267		ミズギボウシ	○				C	II類	
268		ユキザサ	○					要	
269		セトウチホトトギス	○					要	B
270		アマナ	○					II類	
271		ササユリ	○						C
272		ショウジョウバカマ	○						C
273		タチシオデ	○						情報
274		ノギラン	○						情報
275		ホウチャクソウ	○						情報
276		ミヤマナルコユリ	○						情報
277	ヒガンバナ	ハマオモト(ハマユウ)	○				B		
278	ミズアオイ	ミズアオイ	○			準絶	A	I類	
279	アヤメ	ヒオウギ	○					I類	
280		ノハナショウブ	○				C	II類	A
281	イグサ	ヌカボシソウ	○						情報
282		ヒロハノコウガイゼキショウ	○						情報
283	ホシクサ	クロイヌノヒゲ	○			準絶	A	絶滅	
284		オオホシクサ	○				C		B
285		ヤマトホシクサ	○			II類		情報	
286		マツムライヌノヒゲ	○					情報	
287	イネ	ヒメコヌカグサ	○			準絶	C	I類	

※選定の基準となった資料番号及びカテゴリー区分【省略形】を表す。

表 7-6-1-32(7) 注目すべき陸生植物

No.	科名	種名	確認状況		注目すべき種選定基準※					
			既存資料	現地調査	1	2	3	4	5	6
288	イネ	ヒナザサ	○					B	I類	
289		スマカゼクサ	○					C	II類	A
290		ウンヌケモドキ	○				準絶	C	II類	
291		ヒメウキガヤ	○					A		
292		ヒロハノドジョウツナギ	○					A		A
293		ケカモノハシ	○						絶滅	
294		ミノボロ	○					C	II類	
295		スズメノコビエ	○					C	II類	A
296		アイアシ	○					C	要	絶滅
297		タキキビ	○					準絶	絶滅	絶滅
298		ウキシバ	○					C	準絶	A
299		オニシバ	○					C	絶滅	
300		アシカキ	○							B
301		エゾノサヤヌカグサ	○						情報	
302		オガルカヤ	○							B
303		カモノハシ	○							B
304		カリマタガヤ	○						情報	
305		ダンチク	○						情報	
306		ハイチゴザサ	○						情報	
307		マコモ	○						情報	
308	サトイモ	ウラシマソウ	○						情報	
309		キシダマムシグサ	○						情報	
310		マムシグサ	○						情報	
311	ミクリ	アズマミクリ（オオミクリ）	○			II類	C	I類	A	
312		ヤマトミクリ	○			準絶	C	II類	A	
313		ナガエミクリ	○			準絶	準絶	II類		
314	ガマ	コガマ	○				C	要	B	
315	カヤツリグサ	オオナキリスゲ	○				準絶	要		
316		コウボウムギ	○					II類	絶滅	
317		サツマスゲ	○					準絶	要	
318		コウボウシバ	○						絶滅	
319		シオクグ	○				C	準絶	絶滅	
320		アイダクグ	○							B
321		オオシロガヤツリ	○				C	要	B	
322		セイタカハリイ	○				C	準絶	A	
323		イヌクログワイ	○					I類		
324		ミスミイ	○			IB類	A	絶滅		
325		ヌマハリイ	○				C	絶滅		
326		イソヤマテンツキ	○					要	絶滅	
327		ビロードテンツキ	○				A	絶滅		
328		ネビキグサ（アンペライ）	○				C	I類		
329		ミカヅキグサ	○				C	絶滅		
330		イガクサ	○					I類	B	
331		イヌホタルイ	○						C	
332		ノグサ	○					II類	B	
333		コマツカサススキ	○					準絶		
334		ヒメホタルイ	○						B	
335		コウキヤガラ	○				B		絶滅	
336		フトイ	○					II類	A	
337		サンカクイ	○						絶滅	
338		ミカラシンジュガヤ	○			II類	B	I類		
339		コシンジュガヤ	○				C	準絶	A	

※選定の基準となった資料番号及びカテゴリー区分【省略形】を表す。

表 7-6-1-32(8) 注目すべき陸生植物

No.	科名	種名	確認状況		注目すべき種選定基準※					
			既存資料	現地調査	1	2	3	4	5	6
340	カヤツリグサ	ケシンジュガヤ	○					A	絶滅	
341		ウキヤガラ	○						B	
342		エゾアブラガヤ	○						情報	
343		オオイトスグ	○						情報	
344		オタルスグ	○						情報	
345		クロテンツキ	○						情報	
346		コイヌノハナヒゲ	○						情報	
347		ササノハスグ	○						情報	
348		シカクイ	○						情報	
349		タガネソウ	○						C	
350		ヌマガヤツリ	○						情報	
351		ハタガヤ	○						情報	
352		ヒゴクサ	○						情報	
353		ヒナガヤツリ	○						C	
354		ヒメシラスグ	○						情報	
355		ヒメテンツキ	○						情報	
356		ヒメモエギスグ	○						情報	
357	ショウガ	ハナミョウガ	○							B
358	ラン	ヒナラン	○			IB類	B	I類		
359		マメヅタラン	○			準絶	準絶	I類		
360		ムギラン	○			準絶	準絶	I類		
361		エビネ	○			準絶		要	A	
362		ギンラン	○					要	A	
363		キンラン	○			II類	C	要	A	
364		クマガイソウ	○			II類	C	I類		
365		カキラン	○						B	
366		オニノヤガラ	○				準絶			
367		アケボノシュスラン	○						B	
368		ベニシュスラン	○				A	I類		
369		ムカゴトンボ	○			IB類	A	I類		
370		サギソウ	○			準絶	C	II類	A	
371		ムヨウラン	○					準絶		
372		ジガバチソウ	○				C	I類	A	
373		トキソウ	○			準絶	C	I類		
374		クモラン	○					I類		
375		ヒツツボクロ	○				準絶	準絶		
376		オオバノトンボソウ	○						A	
377		クモキリソウ	○						A	
378		サイハイラン	○						A	
379		ミヤマウズラ	○						A	
種類数			379種 1種							

※選定の基準となった資料番号及びカテゴリー区分【省略形】を表す。

表 7-6-1-33 注目すべき陸生植物の現地確認状況

調査月	種名	確認状況
7月	ユキヤナギ	5個体を確認した。
10月	ユキヤナギ	7月調査時と同一の5個体を確認した。

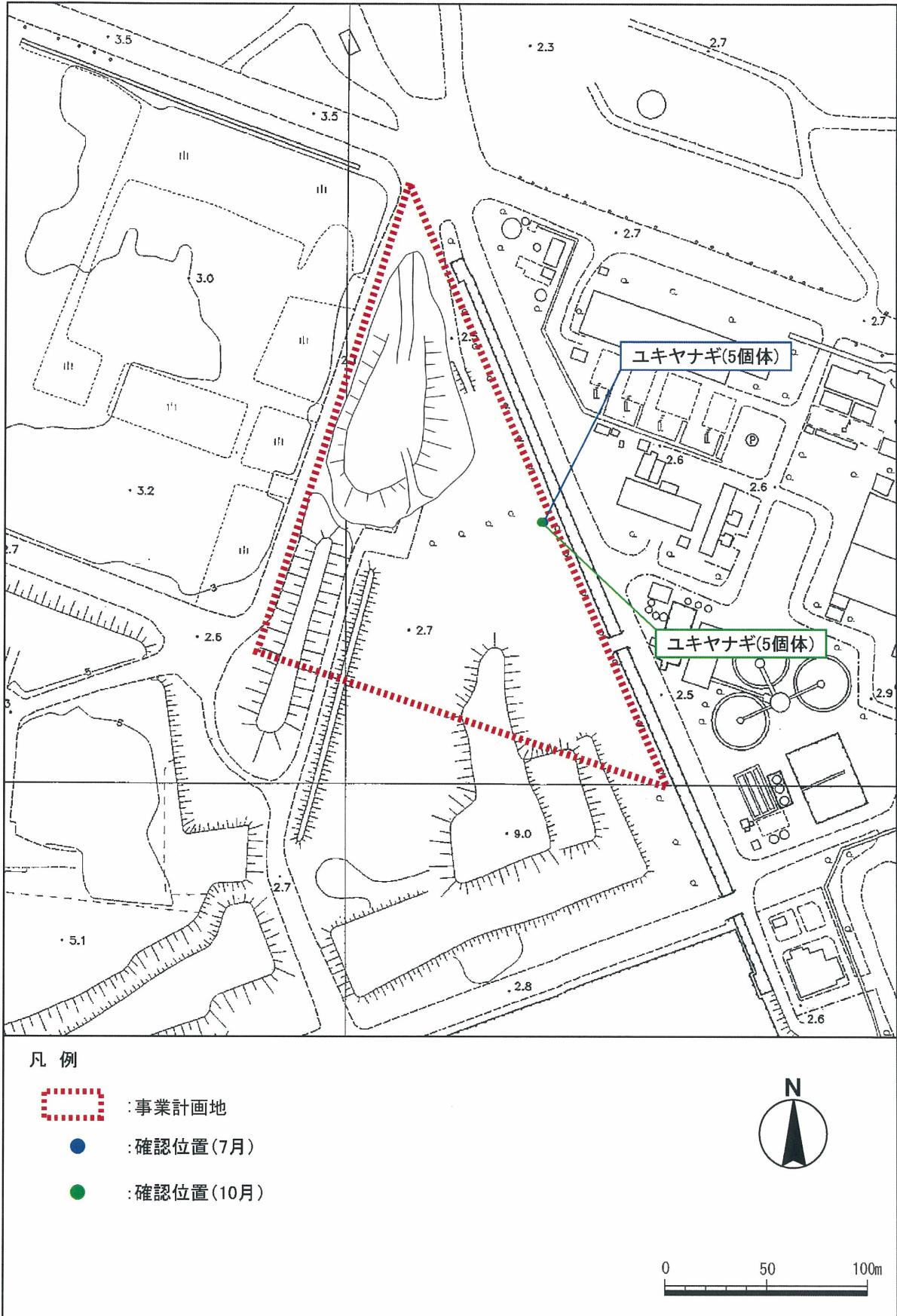


図 7-6-1-10 注目すべき陸生植物の確認位置

7-6-2. 予測

(1) 概要

本事業の実施に伴う陸生動物及び陸生植物の影響予測及び評価の概要は、図 7-6-2-1 に示すとおりである。予測結果は方法書に定められた評価の指針に照らして評価した。

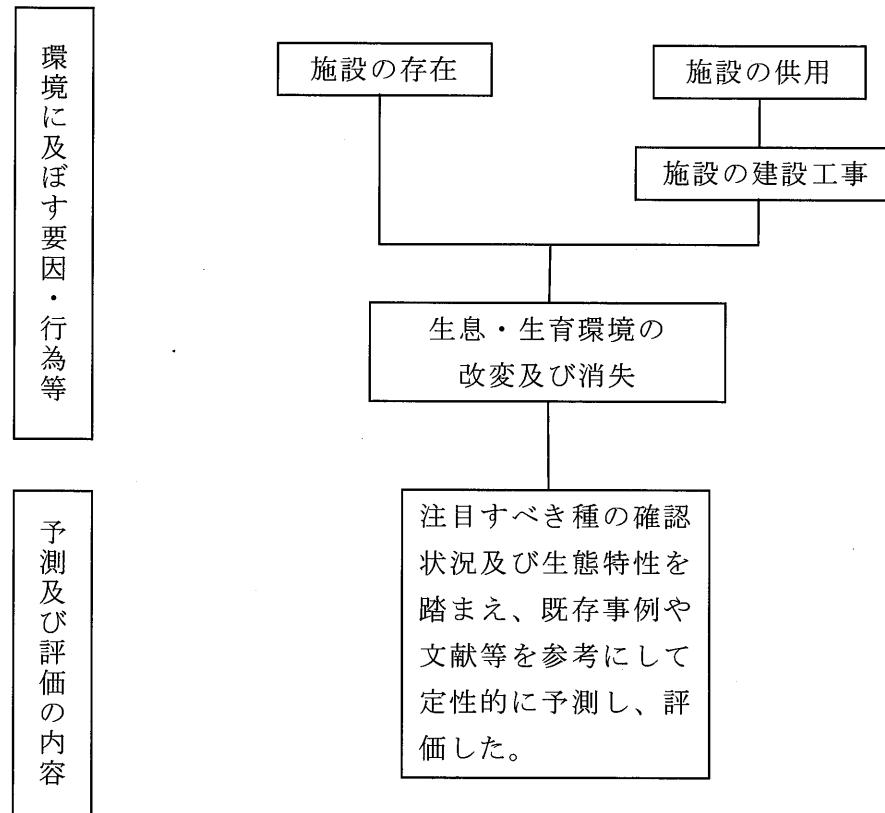


図 7-6-2-1 陸生動物及び陸生植物の影響予測及び評価の概要

(2) 予測

1) 予測内容

陸生動物及び陸生植物の予測内容は、表 7-6-2-1 に示すとおりである。

表 7-6-2-1 陸生動物及び陸生植物の予測内容

予測事項	注目すべき種
予測対象	○哺乳類：イタチ属の一種 ○鳥類：カワウ、ダイサギ、ミサゴ、トビ、 チョウゲンボウ、コチドリ、ケリ、コアジサシ、 ヒバリ、オオヨシキリ、セッカ ○爬虫類：トカゲ、カナヘビ ○昆虫類：マイコアカネ、コハシミョウ、 ツシマヒラタシデムシ、コチャバネセセリ
予測対象時期	工事による影響が最大となる時期及び施設が完成する時期
予測対象地域	事業計画地
予測方法	既存事例や文献等にもとづく定性予測

2) 予測方法

現地調査において確認された動物及び植物のうち、学術上及び希少性の観点から注目すべき種を選定し、予測評価の対象とした。

予測に際しては、事業特性、注目すべき種の確認状況及び生態特性を考慮し、以下に示す環境保全措置を踏まえ、定性的に予測を行った。

- ・ 陸域生態系への影響を可能な限り低減するため、事業計画地の面積は 3ha と必要最小限に止める。
- ・ 事業計画地内では可能な限り緑地面積を確保し、高木と中低木を混植した多層林及び草地を設置することにより、多様な生物の生息・生育空間となるよう配慮する。

(3) 予測結果

1) 陸生動物

① 哺乳類

注目すべき哺乳類の予測結果は、表 7-6-2-2(1)に示すとおりである

表 7-6-2-2(1) 注目すべき哺乳類の予測結果

イタチ属の一種	
分布域及び生態的知見の概要	雌は一定の行動圏をもち土穴などを巣とする。雄はいくつかの雌の行動圏に重なるような行動圏をもつ。九州では年2回繁殖し、一度に1~8頭、平均3~5頭の仔を産む。カエル、ネズミ類、鳥類、昆虫類、ザリガニなどの甲殻類、魚を捕食する。
確認状況	<ul style="list-style-type: none">1月調査時に1箇所で糞が確認された。5月調査時に3箇所で糞が確認された。7月調査時に1箇所で糞が確認された。10月調査時に1箇所で糞が、2箇所で足跡が確認された。
影響の予測結果	<p>【繁殖地への影響】 現地調査では、本種の糞及び足跡が確認されたが巣穴は確認されなかったことから、事業計画地では繁殖していないと考えられる。また、事業計画地は必要最小限の面積に止めることから、施設の存在及び工事の実施による繁殖地への影響はない予測される。</p> <p>【採餌場への影響】 現地調査では、採餌は確認されなかった。本種は、カエル、ネズミ類、鳥類、昆虫類等を捕食することから、事業計画地を採餌場として利用している可能性がある。しかし、事業計画地は必要最小限の面積に止めるとともに、生物多様性に配慮した緑地を新たに設置することから、施設の存在及び工事の実施による採餌場への影響は小さいと予測される。</p>

注) 分布域及び生態的知見の概要是、イタチについて記載した。

出典：「日本の哺乳類 改訂版」（東海大学出版会、平成17年）

② 鳥類

注目すべき鳥類の予測結果は、表 7-6-2-2(2)～(7)に示すとおりである。

表 7-6-2-2(2) 注目すべき鳥類の予測結果

カワウ	
分布域及び生態的知見の概要	本州から九州にかけて留鳥として分布し、海岸、河川、湖沼等の水辺に生息する。潜水して主に魚類を捕食する。水辺近くの林に営巣し、年2～3回繁殖する。産卵期は地域によって異なるが、11～6月の長期にわたる。
確認状況	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月調査時に4例合計4個体が確認された。 ・ 4月調査時に4例合計4個体が確認された。 ・ 5月調査時に3例合計3個体が確認された。 ・ 6月調査時に2例合計2個体が確認された。 ・ 7月調査時に1例1個体が確認された。 ・ 9月調査時に2例合計2個体が確認された。
影響の予測結果	<p>【繁殖地への影響】 現地調査では、飛翔が確認されたが営巣は確認されなかったことから、事業計画地では繁殖していないと考えられる。また、事業計画地は必要最小限の面積に止めることから、施設の存在及び工事の実施による繁殖地への影響はないと予測される。</p> <p>【採餌場への影響】 現地調査では、採餌は確認されなかった。また、本種は潜水して主に魚類を捕食することから、事業計画地は餌場ではないと考えられる。以上のことから、施設の存在及び工事の実施による採餌場への影響は小さいと予測される。</p>
ダイサギ	
分布域及び生態的知見の概要	関東地方から九州にかけて分布し、水田、河口、干潟、浅い池沼等の水辺に生息する。魚類、両生類、甲殻類等を捕食する。産卵期は4～6月で、平地の樹林にコロニーを形成して行われる。
確認状況	<ul style="list-style-type: none"> ・ 5月調査時に1例合計1個体が確認された。 ・ 6月調査時に1例合計1個体が確認された。
影響の予測結果	<p>【繁殖地への影響】 現地調査では、飛翔が確認されたが営巣は確認されなかったことから、事業計画地では繁殖していないと考えられる。また、事業計画地は必要最小限の面積に止めることから、施設の存在及び工事の実施による繁殖地への影響はないと予測される。</p> <p>【採餌場への影響】 現地調査では、採餌は確認されなかった。また、本種は主に水辺で魚類、両生類、甲殻類等を捕食することから、事業計画地は主要な餌場ではないと考えられる。また、事業計画地は必要最小限の面積に止めるとともに、生物多様性に配慮した緑地を新たに設置することから、施設の存在及び工事の実施による採餌場への影響は小さいと予測される。</p>

出典：「大阪府における保護上重要な野生生物」（大阪府、平成12年）

「日本の野鳥」（山と溪谷社、平成8年）

「川の生物図典」（山海堂、平成8年）

表 7-6-2-2(3) 注目すべき鳥類の予測結果

ミサゴ	
分布域及び生態的知見の概要	北海道、本州、四国、九州、南西諸島に留鳥として分布し、北日本のものは冬季に南部へ移動する。河川、湖沼、海岸などに生息する。府内では、大阪湾に採餌のため不定期に飛来するものの、旅鳥として上空を通過するものが観察されるが、繁殖地は知られていない。繁殖期は3月中旬から始まり、樹上や尖塔状の岩礁上に枝や樹皮を利用して営巣する。主に生きた魚類を捕食する。
確認状況	・ 9月調査時に2例合計2個体が確認された。2個体のうち1個体は餌を持って飛翔する行動が確認された。
影響の予測結果	<p>【繁殖地への影響】 現地調査では、飛翔が確認されたが繁殖は確認されなかった。また、事業計画地には、本種が営巣可能な尖塔状の岩礁等は存在しない。以上のことから、施設の存在及び工事の実施による繁殖地への影響はないと予測される。</p> <p>【採餌場への影響】 現地調査では、採餌は確認されなかった。また、本種は主に魚類を捕食することから、事業計画地は主要な餌場ではないと考えられる。以上のことから、施設の存在及び工事の実施による採餌場への影響は小さいと予測される。</p>
トビ	
分布域及び生態的知見の概要	九州以北の各地に留鳥として分布し、海岸、耕作地、河川、湖沼等に生息するが、市街地にも出現する。主に屍肉を食べるが、ネズミ、ヘビ、カエル、鳥類等の生きている小動物も捕食する。産卵期は4~5月で、平地から低山の大木の枝上に巣を作り産卵する。
確認状況	・ 1月調査時に2例2個体が確認された。
影響の予測結果	<p>【繁殖地への影響】 現地調査では、飛翔が確認されたが繁殖は確認されなかった。また、事業計画地は必要最小限の面積に止めることから、施設の存在及び工事の実施による繁殖地への影響は小さいと予測される。</p> <p>【採餌場への影響】 現地調査では、採餌は確認されなかった。本種は屍肉等を餌とすることから、事業計画地を餌場の一部として利用する可能性が考えられる。しかし、現地調査では、飛翔が2例確認されたのみであり、事業計画地は本種の主要な餌場ではないと考えられる。また、事業計画地は必要最小限の面積に止めるとともに、生物多様性に配慮した緑地を新たに設置することから、施設の存在及び工事の実施による採餌場への影響は小さいと予測される。</p>

出典：「大阪府における保護上重要な野生生物」（大阪府、平成12年）
 「日本の野鳥」（山と溪谷社、平成8年）

表 7-6-2-2(4) 注目すべき鳥類の予測結果

チョウゲンボウ	
分布域及び生態的知見の概要	本州北部から中部で繁殖し、秋季から冬季にかけては全国各地で見られる。耕作地、原野、干拓地、川原等に生息し、ネズミ類、昆虫類、小型鳥類等を捕食する。産卵期は4月初旬頃で、岩棚や樹洞に産卵する。近年では建物や鉄塔に営巣する例も報告されている。
確認状況	・ 1月調査時に1例1個体が確認された。
影響の予測結果	<p>【繁殖地への影響】</p> <p>現地調査では、飛翔は確認されたが繁殖は確認されなかった。また、本種は府内では冬鳥であり、事業計画地で営巣する可能性は低いと考えられる。以上のことから、施設の存在及び工事の実施による繁殖地への影響は小さいと予測される。</p> <p>【採餌場への影響】</p> <p>現地調査では、採餌は確認されなかった。本種はネズミ類や昆虫類等を捕食することから、事業計画地を餌場の一部として利用する可能性が考えられる。しかし、現地調査では、飛翔が1例確認されたのみであり、事業計画地は本種の主要な餌場ではないと考えられる。また、事業計画地は必要最小限の面積に止めるとともに、生物多様性に配慮した緑地を新たに設置することから、施設の存在及び工事の実施による採餌場への影響は小さいと予測される。</p>
コチドリ	
分布域及び生態的知見の概要	夏鳥として全国各地に渡来する。河川敷、河川の中州、河口、干潟、埋立地等に生息し、昆虫類等を捕食する。府内では、各地の河川や埋立地の砂礫地などに生息している。産卵期は4~7月で、地上に小石や貝殻等を敷いて簡単な巣を作る。
確認状況	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4月調査時に1例2個体が確認された。 ・ 5月調査時に1例1個体が確認された。 ・ 6月調査時に2例合計5個体が確認された。 ・ 7月調査時に3例合計3個体が確認された。
影響の予測結果	<p>【繁殖地への影響】</p> <p>現地調査では、とまり及び飛翔が確認されたが繁殖は確認されなかった。また、事業計画地は必要最小限の面積に止めることから、施設の存在及び工事の実施による繁殖地への影響は小さいと予測される。</p> <p>【採餌場への影響】</p> <p>現地調査では、採餌は確認されなかった。本種は昆虫類等を捕食することから、事業計画地を餌場の一部として利用する可能性が考えられる。しかし、現地調査では、採餌は確認されておらず、事業計画地は本種の主要な餌場ではないと考えられる。また、事業計画地は必要最小限の面積に止めるとともに、生物多様性に配慮した緑地を新たに設置することから、施設の存在及び工事の実施による採餌場への影響は小さいと予測される。</p>

出典：「大阪府における保護上重要な野生生物」（大阪府、平成12年）

「日本の野鳥」（山と溪谷社、平成8年）

「日本のワシタカ類」（文一総合出版、平成7年）

表 7-6-2-2(5) 注目すべき鳥類の予測結果

ケリ	
分布域及び生態的知見の概要	本州で局地的に繁殖し、近畿、東海、北陸地方で多い。近年九州においても繁殖が確認された。繁殖期は3~6月で、田、畠、河川敷、荒れ地などに枯れ草などを敷いて営巣する。雛は早成性で、孵化後すぐに自分で餌をとるようになる。地上で、昆虫類や草の種子等を捕食する。
確認状況	<ul style="list-style-type: none"> 4月調査時に4例合計5個体が確認された。 5月調査時に2~4個体が多数例確認された。 6月調査時に鳴き声が1例確認された。 7月調査時に1例2個体が確認された。
影響の予測結果	<p>【繁殖地への影響】 現地調査では、とまり及び飛翔等が確認されたが繁殖は確認されなかった。また、事業計画地は必要最小限の面積に止めるとともに、生物多様性に配慮した緑地を新たに設置することから、施設の存在及び工事の実施による繁殖地への影響は小さいと予測される。</p> <p>【採餌場への影響】 現地調査では、採餌は確認されなかった。本種は昆虫類や草の種子等を捕食することから、事業計画地を餌場の一部として利用する可能性が考えられる。しかし、現地調査では、採餌は確認されておらず、事業計画地は本種の主要な餌場ではないと考えられる。また、事業計画地は必要最小限の面積に止めるとともに、生物多様性に配慮した緑地を新たに設置することから、施設の存在及び工事の実施による採餌場への影響は小さいと予測される。</p>
コアジサシ	
分布域及び生態的知見の概要	本州、四国、九州に夏鳥として渡来する。河川の中州、湖沼、海岸、埋立地などの砂礫地に生息し、コロニーを作つて繁殖する。採餌のため内陸の池沼に飛来することも多い。繁殖期は5~7月で砂地に窪みを掘り営巣する。魚食性で小魚を捕食する。
確認状況	<ul style="list-style-type: none"> 5月調査時に1例4個体が確認された。
影響の予測結果	<p>【繁殖地への影響】 現地調査では、飛翔が確認されたが繁殖は確認されなかった。また、事業計画地は必要最小限の面積に止めることから、施設の存在及び工事の実施による繁殖地への影響は小さいと予測される。</p> <p>【採餌場への影響】 現地調査では、採餌は確認されなかった。また、本種は魚類を捕食することから、事業計画地は餌場ではないと考えられる。以上のことから、施設の存在及び工事の実施による採餌場への影響は小さいと予測される。</p>

出典：「大阪府における保護上重要な野生生物」（大阪府、平成12年）
「川の生物図典」（山海堂、平成8年）

表 7-6-2-2(6) 注目すべき鳥類の予測結果

ヒバリ	
分布域及び生態的知見の概要	北海道から九州までの全国で繁殖する。畑、牧場、草原、河原、埋立地等の丈の低い草がまばらに生えて露出した地面の多いところを好む。昆虫類や草の種子を食べる。産卵期は3~7月で、草の根元の地上に巣を作り産卵する。
確認状況	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月調査時に1例合計1個体が確認された。 ・ 4月調査時に草地で常時5個体程度が確認された。 ・ 5月調査時に草地で常時5個体程度が確認され、1箇所で営巣が確認された。 ・ 6月調査時に草地で常時5個体程度が確認された。 ・ 7月調査時に2例合計3個体が確認された。 ・ 9月調査時に1例合計1個体が確認された。
影響の予測結果	<p>【繁殖地への影響】 現地調査では、事業計画地内の1箇所で営巣が確認された。工事の実施により繁殖地が消失するが、事業計画地は必要最小限の面積に止めるとともに、生物多様性に配慮した緑地を新たに設置することから、施設の存在及び工事の実施による繁殖地への影響は小さいと予測される。</p> <p>【採餌場への影響】 現地調査では、採餌は確認されなかったが、本種は、丈の低い草がまばらに生えて露出した地面の多いところに生息し、昆虫類や草の種子を食べることから、事業計画地を餌場の一部として利用する可能性が考えられる。しかし、事業計画地は必要最小限の面積に止めるとともに、生物多様性に配慮した緑地を新たに設置することから、施設の存在及び工事の実施による採餌場への影響は小さいと予測される。</p>
オオヨシキリ	
分布域及び生態的知見の概要	夏鳥として九州以北に渡来し、河川、耕田等のヨシ原に生息する。府内各地のヨシ原で繁殖記録があり、渡りの時期には市街地や低山の草地などにも渡来する。繁殖期は5~8月で、ヨシの茎に営巣する。草地内を移動しながら鱗翅類の幼虫やクモ類等を捕食する。
確認状況	<ul style="list-style-type: none"> ・ 5月調査時に6例合計7個体が確認された。 ・ 6月調査時に3例合計3個体が確認された。 ・ 7月調査時に鳴き声が1例確認された。 ・ 9月調査時に古巣が1箇所で確認された。
影響の予測結果	<p>【繁殖地への影響】 工事の実施により繁殖地が消失するが、事業計画地は必要最小限の面積に止めるとともに、生物多様性に配慮した緑地を新たに設置することから、施設の存在及び工事の実施による繁殖地への影響は小さいと予測される。</p> <p>【採餌場への影響】 現地調査では、採餌は確認されなかったが、本種は、河川、耕田等のヨシ原に生息し、鱗翅類の幼虫やクモ類等を捕食することから、事業計画地を餌場の一部として利用する可能性が考えられる。しかし、事業計画地は必要最小限の面積に止めるとともに、生物多様性に配慮した緑地を新たに設置することから、施設の存在及び工事の実施による採餌場への影響は小さいと予測される。</p>

出典：「大阪府における保護上重要な野生生物」（大阪府、平成12年）

「日本の野鳥」（山と溪谷社、平成8年）

「川の生物図典」（山海堂、平成8年）

表 7-6-2-2(7) 注目すべき鳥類の予測結果

セッカ	
分布域及び生態的知見の概要	留鳥として、本州、四国、九州、南西諸島に分布し、北方の個体は冬に暖地に移動する。府内では各地の河川敷や農耕地などの草地で繁殖し、少数が越冬するが、夏季と冬季で個体群に入れ替わっているといわれる。繁殖期は4~9月で、イネ科植物をクモの糸でつづって営巣する。草地内を移動しながら昆虫類やクモ類を捕食する。
確認状況	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4月調査時に鳴き声が2例確認された。 ・ 5月調査時に4例合計4個体及び鳴き声が1例確認された。 ・ 6月調査時に4例合計4個体及び鳴き声が1例確認された。 ・ 7月調査時に常時2~3個体が確認された。 ・ 9月調査時に3例合計3個体及び鳴き声が1例確認された。
影響の予測結果	<p>【繁殖地への影響】</p> <p>現地調査では、飛翔等が確認されたが繁殖は確認されなかった。また、事業計画地は必要最小限の面積に止めるとともに、生物多様性に配慮した緑地を新たに設置することから、施設の存在及び工事の実施による繁殖地への影響は小さいと予測される。</p> <p>【採餌場への影響】</p> <p>現地調査では、採餌は確認されなかつたが、本種は、河川敷や農耕地などの草地に生息し、昆虫類やクモ類を捕食することから、事業計画地を餌場の一部として利用する可能性が考えられる。しかし、事業計画地は必要最小限の面積に止めるとともに、生物多様性に配慮した緑地を新たに設置することから、施設の存在及び工事の実施による採餌場への影響は小さいと予測される。</p>

出典：「大阪府における保護上重要な野生生物」（大阪府、平成12年）

③ 爬虫類

注目すべき爬虫類の予測結果は、表 7-6-2-2(8)に示すとおりである。

表 7-6-2-2(8) 注目すべき爬虫類の予測結果

トカゲ	
分布域及び生態的知見の概要	北海道、本州、四国、九州に分布する。低地から山地に生息し、日当たりの良い草地や石垣、土手などに多い。産卵期は 5 月下旬から 6 月中旬で、石や倒木の下、土手の斜面などに巣穴を掘って産卵する。昆虫類、クモ類、ミミズ等を捕食する。
確認状況	・ 5 月調査時に 2 箇所で合計 2 個体が確認された。
影響の予測結果	【繁殖地及び採餌場への影響】 現地調査では、繁殖や採餌は確認されなかったが、本種は低地から山地に生息し、昆虫類、クモ類、ミミズ等を捕食することから、事業計画地を繁殖や採餌等に利用している可能性が考えられる。しかし、事業計画地は必要最小限の面積に止めるとともに、生物多様性に配慮した緑地を新たに設置することから、施設の存在及び工事の実施による採餌場への影響は小さいと予測される。
カナヘビ	
分布域及び生態的知見の概要	トカラ海峡以北の日本に広く分布し、平地から低山地の堤、草原、やぶ、庭先などに生息する。産卵は 5~9 月の間にみられ、1 回当たり 1~8 個の卵を産み、1 年に 1~6 回産卵する。小型昆虫類、クモ類、ワラジムシ等の甲殻類等を捕食する。
確認状況	・ 5 月調査時に 3 箇所で合計 3 個体が確認された。 ・ 7 月調査時に 1 箇所で合計 1 個体が確認された。
影響の予測結果	【繁殖地及び採餌場への影響】 現地調査では、繁殖や採餌は確認されなかったが、本種は、平地から低山地の堤、草原、やぶ、庭先などに生息し、小型昆虫類、クモ類、ワラジムシ等の甲殻類等を捕食することから、事業計画地を繁殖や採餌等に利用している可能性が考えられる。しかし、事業計画地は必要最小限の面積に止めるとともに、生物多様性に配慮した緑地を新たに設置することから、施設の存在及び工事の実施による採餌場への影響は小さいと予測される。

出典：「川の生物図典」（山海堂、平成8年）

「日本の両生類・爬虫類」（小学館、昭和 60 年）

「山渓ハンディ図鑑 10 日本のカメ・トカゲ・ヘビ」（山と渓谷社、平成 19 年）

④ 昆虫類

注目すべき昆虫類の予測結果は、表 7-6-2-2(9)～(10)に示すとおりである。

表 7-6-2-2(9) 注目すべき昆虫類の予測結果

マイコアカネ	
分布域及び生態的知見の概要	北海道、本州、四国、九州に分布する。おもに平地や丘陵地の挺水植物が繁茂する池沼に生息するが、海岸沿いの汽水沼にもみられる。成虫は7月～11月にかけて出現する。
確認状況	・ 7月調査時に任意採集により1個体が確認された。
影響の予測結果	【生息地への影響】 本種は、平地や丘陵地の挺水植物が繁茂する池沼に生息するが、事業計画地には本種の生息に適した池沼は存在しないことから、事業計画地は本種の主要な生息環境ではないと考えられる。さらに、事業計画地は必要最小限の面積に止めるとともに、生物多様性に配慮した緑地を新たに設置することから、施設の存在及び工事の実施による生息地への影響は小さいと予測される。
コハンミョウ	
分布域及び生態的知見の概要	本州、四国、九州、沖縄に分布し、平地の砂質地に生息する。成虫・幼虫とも食肉性で、幼虫は地面に穴を掘って潜み、近づいた小型昆虫類を捕食する。
確認状況	・ 7月調査時に任意採集により3個体が確認された。 ・ 7月調査時にライトトラップにより1個体が確認された。
影響の予測結果	【生息地への影響】 本種は、平地の砂質の場所に生息し、小型昆虫類を捕食することから、事業計画地の裸地を生息環境として利用していると考えられる。しかし、事業計画地は必要最小限の面積に止めるとともに、生物多様性に配慮した緑地を新たに設置することから、施設の存在及び工事の実施による生息地への影響は小さいと予測される。

出典：「日本産トンボ成虫幼虫検索図説」（東海大学出版会、昭和63年）

「トンボの調べ方」（文教出版、平成17年）

「富山県の絶滅のおそれのある野生生物」（富山県、平成14年）

表 7-6-2-2(10) 注目すべき昆虫類の予測結果

ツシマヒラタシデムシ	
分布域及び生態的知見の概要	本州及び対馬に分布し、近畿地方では、河川敷や湖畔の開放的な環境で見られる。近縁のオオヒラシデムシと混生するが、本種の方が湿った場所を好む。成虫はおもに5~7月に出現する。府内では淀川や大和川の河川敷などに生息するほか、富田林等でも記録がある。
確認状況	・ 7月調査時にベイトトラップにより5個体が確認された。
影響の予測結果	<p>【生息地への影響】 本種は河川敷や湖畔の開放的な環境に生息することから、事業計画地を生息地として利用していると考えられる。しかし、事業計画地は必要最小限の面積に止めるとともに、生物多様性に配慮した緑地を新たに設置することから、施設の存在及び工事の実施による生息地への影響は小さいと予測される。</p>
コチャバネセセリ	
分布域及び生態的知見の概要	北海道、本州、四国、九州に分布し、ササ類の多い林床でよくみられる。成虫は4月~8月に2回まれに3回発生する。幼虫の食草はタケ科のササ類、イネ科のススキ等である。
確認状況	・ 5月調査時に任意採集により1個体が確認された。
影響の予測結果	<p>【生息地への影響】 本種はササ類の多い林床でよくみられ、幼虫はタケ科やイネ科の植物を食草とすることから、事業計画地の草地等を生息場所として利用していると考えられる。しかし、事業計画地は必要最小限の面積に止めるとともに、生物多様性に配慮した緑地を新たに設置することから、施設の存在及び工事の実施による生息地への影響は小さいと予測される。</p>

出典：「滋賀県で大切にすべき野生生物」（滋賀県、平成18年）
 「大阪府における保護上重要な野生生物」（大阪府、平成12年）
 「チョウの調べ方」（文教出版、平成10年）

7-6-3. 評価

(1) 評価の方法

予測結果について、以下に示す方法書の評価の指針に照らして評価した。

評価の指針	①環境への影響を最小限にとどめるよう環境保全について配慮されていること。 ②環境基本計画、大阪府環境総合計画、自然環境の保全と回復に関する基本指針等、国又は大阪府が定める環境に関する計画又は方針に定める目標の達成と維持に支障を及ぼさないこと。
-------	--

(2) 評価結果

注目すべき動物については、施設の存在及び工事の実施により一定の影響を受けるものと考えられるが、事業計画地は必要最小限の面積に止めるとともに、生物多様性に配慮した緑地を新たに設置することにより、影響が最小限になるよう配慮している。

環境保全対策としては、

- ・陸域生態系への影響を可能な限り低減するため、事業計画地の面積は 3ha と必要最小限に止める。
- ・緑化対策として敷地面積の 30%以上を緑地として確保する。
- ・高木と中低木を混植した多層林及び草地を設置することにより、多様な生物の生息・生育空間となるよう配慮する。
- ・工事に当たっては、低騒音・低振動型建設機械の使用に努める。

の対策を講じることから、自然環境に関して定められた目標の達成と維持に支障を及ぼさないとともに、環境への影響を最小限にとどめるよう環境保全について配慮しているものと評価する。

以上のことから、評価の指針を満足すると考える。